2 章：スコットランドにおける教会と国家

章目次

⑴ジェームスと教会と貴族・・・2

⑵北の伯たちの謀反とその処分をめぐって・・・11

⑶ブラックの説教と司法管轄権闘争・・・19

⑷八人衆とエディンバラの町の騒擾（そうじょう）・・・25

⑸聖職者との衝突を避けるための仕組みづくり・・・30

⑹聖職者の代表を議会の審議に参画させる試み・・・37

⑺ジェームス、主教制の復活に傾いていく・・・41

⑻イングランドの王位継承をめぐって・・・45

⑴ジェームスと教会と貴族

（1603 年、寛容の問題1)）

エリザベスが崩御したとき、１つの大きな問題がすでにその解答を迫っていた。すなわち、国家の教会とその反対派（ピューリタンやカトリック）との関係の問題である。それはスチュアート朝の王がイングランドで統治を続ける限り、人々の心を掻き立てる運命にあった。それは、エリザベスの後継者2)がまったく扱ったことがない問題というわけではなかった。もっとも、彼のスコットランドにおけるその問題の扱い方は、彼がイングランドにおいてその問題を上手に扱えるとはとても思えない扱い方であったが。

（1560 年から 1572 年。対照的だったイングランドとスコットランド）

多くの点において 16 世紀におけるスコットランドの状況は、イングランドのそれとは逆であった。エリザベス朝イングランドのもっとも注目すべき特徴は、国民生活を構成するさまざまな要素が互いに依存し合っているところからくる調和であった。ところがツイード川の北側では、たしかに同じ要素がほとんど出てくるのであるが、それらは互いに際立っており、はっきりとしたコントラストを成していた。聖職者はより聖職者

1） 寛容（toleration）とは、自分の考えとは異なる考え方の存在を認めることである。とくに 17 世紀のヨーロッパにおいては、国家の定めた教会以外の宗派の存在が認められるか否かである。すなわち、信仰の自由、あるいは良心の自由の問題であった。エリザベス朝では国教会の基礎固めが行われたが、それとカトリックとの関係性をどうするか、ピューリタンの関係性をどうするかが宿題として残った。エリザベスの跡を継いだジェームス１世は、すでにスコットランド王として自国のピューリタン（この場合は長老派）やカトリックと対峙してきて、彼らとの関係性について対処してきたが、彼がどんな風にピューリタンやカトリックに対して対処してきてきたかがこれから語られていくということであろう。

2） ジェームス 6 世・1 世（1566 生－1625 没，スコットランド王としてはジェームス 6 世：在位 1567－1625，イングランド・アイルランド王としてはジェームス 1 世：在位 1603－1625）のこと。父親はロード・ダーンリーことヘンリー・スチュアート、母親はスコットランド女王メアリー。メアリーの父親はスコットランド王ジェームス 5 世、その父親はスコットランド王ジェームス 4 世、その妻はイングランド国王ヘンリー7 世の娘マーガレット。よって、マーガレットの息子の娘の息子なので、ヘンリー7 世から数えて玄孫に当たる。これによってイングランド王位の継承権者の 1 人となる。エリザベス 1 世から見ると、伯母の孫に当たる。（父親ヘンリー8 世の姉マーガレットの曾孫。）（ref: Jenny Wormald, *James VI and I*, DNB）

然としており、自治都市はより孤立していて自己充足していた。とくに貴族階級は、かつての封建制度の無法性をいまだに保持していた。それはヨーロッパのほかの国々ではもうとっくの昔に許されなくなっているものだった。

（教会統治に関するノックスの見解）

宗教改革が最初にスコットランドを通り過ぎたとき、階層間の既存の差異をある程度まで消滅させ、真の国民的統一を実現するような変化が起こるのではないかと一瞬思われた。貴族も自治都市民も、富める者も貧しき者も、中世的教会を葬り去ろうとしている説教師たちに加わった。ただし、古いヒエラルキー（階層）を壊したうえで新しいヒエラルキーを打ち立てることは、決してノックスやその仲間たちの意図するところではなかった。彼らの考え方によれば、もはや平信徒と聖職者の区別はなくなるはずであった。（後者がその特有の義務を遂行するために分けて考えられなければならない場合のほかは。）スコットランド教会の最初の総会で座を占めた 42 人のうち、牧師はたった 6 人であった。男爵や伯爵はいかなる選抜もなく話し合いに参加することが許された。最初の改革者たちが自分たちが生み出した総会の性質について何らかのはっきりとした考えをもっている限り、彼らは総会を、教会関係の事柄により密接な関連をもつ者たちだけではなく、国民の自然なリーダーであるところの者たちによっても国民が代表される機関にしようと考えていた。

（上級貴族が教会を見捨てる）

しかし、そのような腹積もりは最初から失敗する運命にあった。上級貴族の中には、改革教会に全身全霊で尽くす者も個人レベルではちらほらといただろう。しかし、ほとんどの場合、伯爵や男爵たちは、修道院の土地を収奪して腹がふくれるとすぐに満足してしまったのである。彼らは身分の低い牧師たちと平等な立場で話し合いの場につこうなどとはからっきし思わなかった。また、福音の伝播などといったことにもまったくかほとんど関心をもたなかった。しかし、彼らの気持ちを遠ざけたのは単に無関心ということだけではなかった。彼らは本能的に、「自分たちに高い地位を与えてくれたシステム3)は、もう終わりだ。自分たちの地位に対する直接の脅威を把握すべきは、牧師たち

---

3)　自分たちに高い地位を与えてくれたシステム：つまり、封建制度というわけか。彼らは国王より伯爵や男爵の地位を授かっている。所領を保証されている。そして、自分の家来とも主従関係を結んでいる。封建制度が彼らの高い地位を保証してくれている。ところが、長老主義は「万民は神の前に平等なしもべである」という考え方のもとに、身分の平

が得つつある影響力からだ」と感じていたのだ。スコットランドにおける大貴族は、イングランドにおいてそのように呼ばれる者とは相当ちがう。スコットランドの大貴族は、自分の所領の中ではほとんど君主と変わらない権威を発揮した。彼の家来は、彼の領地の中では彼に生殺与奪の権を握られ、彼を自分の行為の説明責任を果たすべき唯一の人物と見なしていた。家来は、求められればいつでも戦場についていった。長く休ませてもらえることなどめったになかった。いつも何らかのけんかに駆り出され、近隣の領主の攻撃に駆り出され、先祖伝来の侮辱の復讐に駆り出された4)。

（牧師たちの強さ）

支配者層の思うがままにされている物理的な力に関しては、牧師たちには今のところこれに対処する能力はなかった。しかし、彼らには遅かれ早かれ必ず力になりうる生命のエネルギーがあった。ほとんど例外なくスコットランドの知性は彼らの階層にあっただけではなく、彼らの本当の強さは、断固とした姿勢でもって、人間のすべての行動の基本としての神の法のために証言を行おうとするその断固とした姿勢と、自己滅却的な活動によって、自分たちのいうことに耳を傾けてくれる人々に対して不純と悪による束縛から自由になることを呼びかけるその自己滅却的な活動にあったのである。人生が流血と圧迫で汚れている者たちと、自分たちが生きている無秩序な世界に秩序をもたらすために、そして、自分たちの祖国を敬虔で平和な国にするために世評に左右されることなく奮闘している者たちとの間にどうして長らく協調が保たれえたであろうか。

（名ばかり主教5））

準化を事実上推し進めている。こうした事情に当惑したか。

4） いつも・・・駆り出された：これが前々段で述べられていた「封建制度の無法性（turbulence of feudalism）」か。本文で書かれているようなことはいってみれば「私闘」であり、近代では次第に許されなくなっていたことだと思われる。

5） 名ばかり主教：原文 “The Tulchan Bishops”。“tulchan”（'tʌlxən）とは、もともとはゲール語由来の語で原義は「小さな塚」という意味だったらしい。（ref: OED, ‘tulchan’）スコットランドのある地域では、農家では子牛が死ぬと、子牛の皮をとり、それを牛小屋の塚の上にかけておいたという。すると、母牛は、その皮の匂いをかぎ、本能的に乳を出したという。農家はそれを搾乳できたという。そこから、その子牛の皮を「タルハン」というようになったらしい。あるいは、子牛の皮に藁を詰め、人形を作って、それを母牛にあてがったという。それでも同じ効果が得られたという。

スコットランドでは、1560 年にカトリックからプロテスタントに移行することが決まったが、まだまだ問題はたくさんあった。その 1 つは、どのように教会を組織立て、そ

貴族が 1572 年、リースにおいて牧師たちとの間で行き着いた妥協6)は、貴族政治にとっては、将来の敗北を確実に予兆する見かけ上の勝利の 1 つであった 。聖職者は痛く自分たちの意志に反してプロテスタント・ビショップ制に同意するように追い込まれた。自治都市や小ジェントリーは、大領主の封臣の敵ではなかった。前者は譲歩するこ

のためにどのような制度を用いるかであった。とくにカトリックの頃からのビショップ、アークビショップの職制をどうするかが問題になった。改革派は、それを廃止するかなるべく改革思想にあったものにしたかった。一方、王権側は、これらの職制の任命権を握って、王権の支配が何らかの形で教会にも及ぶようにしたかった。そこで両者の調整として話し合いが行われ、その結果決まったのが 1572 年のリース協約（Concordat of Leith）であった。そして、ビショップ、アークビショップの職制を残し、王権が指名するが、一方で教会総会の同意も受けることと決まった。

当時は王権といっても国王ジェームス 6 世はまだ幼君であり、摂政が立てられ、その摂政を中心として枢密会議が政治を取り仕切っていた。そして、その枢密会議を構成したのは有力貴族たちであった。よって、実際には有力貴族が主教を推薦し、その代わり、その主教と、主教の聖職禄のかなりの部分をキックバックしてもらう約束を結んだらしい。つまり、主教は大貴族にとって、教会財産という乳を出させる道具のようなものだった。そこで上記の喩えから、そのような主教を「タルハン・ビショップ」というようになったらしい。そして、ガーディナーは、これが国民の中で真面目で敬虔な者たち多数を怒らせ、スコットランドでは主教制は呪われた制度になったと示唆している。より急進的な長老主義者が出てくる要因になったとしている。（なお、以上のことから「タルハン・ビショップ」をとりあえず「名ばかり主教」と訳すことにした。）

（参考文献）

○Alan R. MacDonald, *The Jacobean Kirk, 1567-1625: Sovereignty, Polity and Liturgy* (Ashgate; Aldershot, U. K., 1998) ; pp. 9-10.

○Gordon Donaldson, *Scotland: James V to James VII* (Oliver & Boyd; Edinburgh and London, 1965)

○David Calderwood, ed. by Thomas Thomson, *The History of the Kirk of Scotland*, vol. iii. (The Wodrow Society; Edinburgh, 1843) ; p. 168, 172, 207, etc.

○シェリダン・ギリー，ウィリアム・Ｊ・シールズ著，指昭博，並河葉子監訳赤江雄一ほか訳，『イギリス宗教史：前ローマ時代から現代まで』（法政大学出版局；東京，2014）；171－172 頁

○飯島啓二，「スコットランド長老派教会の成立に関する一考察」，『国際基督教大学学報』，ＩＩＢ，社会科学ジャーナル 3 号 229－251 頁，1962－02－28（国際基督教大学社会科学研究所）

6） 妥協：すなわち、リース協約（Concordat of Leith）のこと。王権側は、プロテスタント体制下でのビショップ、アークビショップの職制の存続に成功し、その任命権の取得に成功した。それは改革派にとっては譲歩であった。

とを余儀なくされた。しかし、それは譲歩がなされた相手方に栄誉を与えるような譲歩ではなかった。貴族は国のことを少しも考えていなかった。教会のことも。その権益を彼らはこのように簡単に処分していたのだ。彼らが気遣っていたのは、彼らが採用したスキームによって得られるかも知れない富のことについてだけであった。主教は適法に叙任されることになる。しかし、それは彼らが監督制教会において彼らに割り当てられている牧師の統治に参画するためではなかった。収入の大部分を、彼らに管区をあてがってくれた貴族に手渡すためであった。そして、その時から主教制は、スコットランドでは呪われた制度となった。いかなる者も、もともとはもっていたかも知れない自尊心を放棄することなく主教になることは不可能となった。

（長老制神授説）

長老主義がこの妥協から得た精神的強さは計り知れなかった。まもなく、国民の中で正直で自立したすべての者たちによって、「長老制こそ神によって指定された教会統治の形態であり、それから少しでもずれることは罪である」との信念が真剣にもたれることとなった。たとえアンドリュー・メルヴィルがその信念を生み出すことに関わった功労者であることを認めなければならないとしても、彼が使いうるいかなる議論よりも新しい主教制をめぐる不名誉な光景のほうが、はるかに影響力があったことは確かなことだ。

（1581 年、第 2 規律の書）

1581 年、第 2 規律の書が総会の承認を得た。これによって教会は、長老制に基づく諸制度を無制限に取り入れることを明らかにした。その制度は若干の修正を経たうえで、すべての反対を克服した制度であり、今日まで保たれているものである。当時、改革の導入以来過ぎ去っていった年月の間に、教会の総会はだんだん国民会議的なものから、よりはっきりと教会会議的なものになっていた。その強みは、そこにスコットランドで最良のもの、もっとも高貴なもののすべてが代表されていることであり、その教会法廷は中間層、下層の者に政治教育を施しているところにあった。それ（政治教育）は、彼らにとって議会では望むべくもないものであった。一方その弱点は、そのような会議はどうしても原理を究極まで押し進めてゆき、人々の良心の上に専制者のごとく君臨し、人々に道徳律や宗教的戒律を守らせようとするものになりがちであることであった。教会の非難は放埒（ほうらつ）者や飲んだくれだけではなく、主日7)に教会に行かない者にまで

7） 主日：つまり、日曜日。

激しく及び、教区の牧師の監督のもとカーク・セッション（教会会議）が開かれ、きまりを破った者が罰せられた。カーク・セッションでは俗世の身分の高低はまったく顧みられなかった。貴族は敬虔な靴屋や職人と同等な立場で会することを蔑（さげす）んでいたので、ごく自然とそのような会議には近寄らなかった。

（長老主義の集会の政治的性格）

こうした長老派の集会が政治的な機関になることはおそらく避けられないことであっただろう。そうした集会にとって、カルヴァン主義的に解釈された聖書は、生きていくうえで神に与えられた準則であった。国王と貴族はそれに従っている限り、そして、その原理を実行に移すことに人生を捧げている限り、敬われるべきであり従われるべき存在であった。しかし、そうでないのなら（そうであるのかないのかを判断するのは聖職者のみであった）、彼らに対して面と向かって抵抗するのが教会の義務であった。それはちょうど中世においては、ローマ教皇の義務だと考えられていたのと同じである。しかし、長老主義は、単に誰にも邪魔されず己の道を追求するために放っておかれることを求めていたのではない。それは国家権力者が、この地上に天上の王国とできるだけよく似た王国を樹立するための道具となることを求めていたのである。個人の自由や人間性の多面的な豊かさについては、長老主義は何も知らなかった。しかし、それは支配者の恣意的な権力に対する抵抗を促すことに大いに貢献したのである。長老主義は自分たちの集会以外のものが神授権をものにすることを頑として拒んだ8)。そして、国王に明確な法に自己の行動を従わせるように呼びかけたのである。もしも国王が長老主義を克服したいのなら、長老主義自体の法よりももっと幅の広い、自然の事実とよく調和する法9)に訴えかけることによってのみ可能であった。

16 世紀末葉のスコットランド教会が、教会法の執行に関わる問題だけでなく厳密な意味での政治問題にまでとらわれることは避けがたいことであった。当時、宗教問題はすべからく政治問題でもあった。そして、スコットランド教会の組織のコンパクトさは、同教会にそれに少なからぬ精力を注ぐことを可能にした。周囲では野蛮で挑戦的な封建主義が急速に高まっており10)、怒れるカトリック・ヨーロッパがプロテスタンテ

8） ジェームス 1 世は王権神授説を唱えていたから、それに対して面と向かって抵抗することになる。王権と長老主義は所詮相容れぬ関係であった。

9）もっと幅の広い、自然の事実とよく調和した法：おそらく、寛容の精神に基づいた法ということであろう。このような法を用いることによって初めて長老主義を克服できるということだと思われる。ガーディナーの念頭には、常に 1689 年の寛容法（Edict of Toleration）があると思われる。

10）周囲では野蛮で挑戦的な封建主義が急速に高まっており：初め貴族たちはスコットラ

ィズムの防衛の間隙を突こうとしており11)、スコットランド教会はすべての政治的な動きが、同教会がある意味代表しているといえる国民にとって、生きるか死ぬかの問題を内包していると感じていた。

（ジェームスの性格）

もしも集会を主導し、集会を通して多様な会衆を主導した牧師たちが、自分たちの主権者は自分たちが信頼をおくことができる人物だと安心することができたなら、多くの災難は避けることができただろう。ジェームス 6 世はたしかにこのような困難な時期の支配者としてふさわしい特長をいくつももっていた。彼は明るくて、気立てが良くて、臣民の繁栄の増進を心から願っていた。また、その精神力は尋常ならざるレベルであり、その記憶力は良く、その学識は、とくに神学的なことに関しては決してあなどれないものがあった。また、知的に寛容で、自分とは異なる意見の持ち主ともうまくやろうとした。彼はとりわけ調停者になることを望み、以前戦争があったところに平和をもたらそうとし、これまでけんけんがくがくやっていた者たちを仲良くやっていく方向に導こうとした。さらに、狂信主義はよくないと身にしみて思っていた。

しかし、これらの長所は深刻な短所によって台無しにされた。彼はあまりにも自信がありすぎたので、自ら苦労して難しい問題を解こうとは思わなかった。また、物事の比例的価値についての認識が甘かったので、1 つの事案について枝葉末節を排して重要な点をつかむということができなかった。また、他人の教条主義を徹底して嫌う一方で、自身がもっとも教条主義的であった。しかし、支配者の欠点の中でもっとも致命的なものとして、彼は自分に刃向かう者の最悪を容易に想像した12)。彼には本来のリーダーが敵として申し分ない相手を見つけたときに、それをむしろ喜ぶという度量の広さがなかった。また、エリザベスは人民の感情を直感的に知覚するという能力をもっていた

ンド教会の味方をしてくれた。だが、離れていった。それは、長老主義が神の前では人はすべて平等のもと、貴族も平民も同じだという思想を広めようとしていると感ずいたためであり、そして、自分たちの存立の基盤、すなわち封建主義（家来との固い上下関係を基本とする）が脅かされていることを感じたためであった。そして、いつの間にかスコットランド教会が力を強めることを押さえるほうの側に回った。彼らは自分たちが推薦する聖職者を主教の座につけ、教会に王権の力が及ぶようにしようとした。そして、聖職禄を自分たちのほうに横流しした。こうしたことをいっているのではないか。

11）プロテスタント陣営が主教派と長老派に分かれると、その間隙を突いてスペインなどのカトリックの大国が漁夫の利を得ようとしてやってくるという意味であろう。

12）おそらく、相手がいかに人物的に立派でも、自分に反対していれば、「ふん！　井戸に落ちて死ぬがいい」などと容易に思ったということではないか。

が、そして、それが彼女の長い治世の間で彼女に非常に役に立ったが、彼にはそうした能力も欠けていた。常日頃接している者には暖かくて情愛に満ちていたが、一方で、真に偉大な人物に対しては決して愛着を抱かなかった。彼はお世辞を忠義と勘違いし、自身の生活は清かったが、自分の身の回りにはその素行について全然よい評判を聞かない者を集めた。彼のお気に入りが彼の気立ての良さを悪用することは、彼の自己充足感を傷つけなければ容易なことであった。また、彼の前では恭しい態度をとって、その時たまたま彼が心を砕いている問題については反対しなければ、誰でも彼を思い通りに操れただろう。

（ジェームスの立場）

不幸にもジェームスが成人に達したとき、彼はよくない寵臣たちの手の内にあった。彼らはジェームスに、聖職者こそ彼の本当の敵であると教えた。こうした寵臣たちはフランスの宮廷の影響のもとで動いていたことが知られていた。彼らは外国の軍隊の助けによってローマ・カトリックの制度を再構築することに支持を与える可能性があると強く疑われていた。そのような状況下で聖職者が従事した闘争は、急速に新しい様相を帯びてきた。すなわち、それはもはや教会財産が聖職売買されるように貴族たちによって指名されたごく少数の堕落した者に渡されてよいのかという問題ではなくて13)、スコットランドが危機に立たされているとき、間違った方向に導かれた王に対して、「陛下は寵臣に、ご自身と臣民が破滅する道を用意することを許しておられます」と警告するために自由にしゃべれるかの問題であった。

（1584 年、主教の権限を復活させる）

ジェームスは牧師たちに、支配権はまだ自分のほうにあるということを感じさせることにした。すなわち、彼は貴族の大部分は、牧師を抑えるための方策に喜んで協力する

13）貴族たちは、自分の息のかかった者を空位の生じた主教区の主教に推薦して、その代わり、新主教からその聖職禄のかなりの部分を受け取ったという。（ref: 飯島,「スコットランド長老派教会の成立に関する一考察」240 頁：「モートン伯（Earl of Morton）は、直ちに行動を開始し・・・」；本章 4 頁注 5、とくに第 3 段落）つまり、主教の側からしてみれば、「推薦してもらう、その代わり、主教になった際は聖職禄のかなりの部分を支払う」という対価関係が成り立ち、主教職を買ったといえる。そこが問題になった。

ということを知っていた。1584 年、彼は議会から、教会統治全体を主教の手に委ねるという法律を獲得した14)。

（1586 年、ジェームス、牧師たちにより友好的になる）

さまざまな紆余曲折を含みながら、2 年間、国王と牧師との間で闘争が続いた。その最後のほうで、ジェームスは牧師たちもある程度は正しいということを認めざるを得なくなった。1586 年、スペイン王がイングランドに侵入する準備を進めていた。もしもエリザベス朝が崩壊すれば、スコットランドも破滅はほとんど免れない。ジェームスはスペインの臣下にもローマ教皇の臣下にもなりたくはなかった。そこで彼は、両王国を脅かしている共通の敵に対してイングランドと相互防衛同盟を結んだ15)。そのような政策の変化は、国王と牧師との和解を阻んでいた主要な障害を自然と除去した。この両者に心からの共感が湧き上がってくることは不可能であったが、ある種の協調が存在した。それはすなわち、共通の目的を追求することにおいて一緒になった異なる気質の持ち主たちの間によく見られる協調である。両者の間には常に口論があったが、それにもかかわらず王は一歩一歩自分の主張を緩めていった。そして、ついに 1592 年、長老主義をその完全な形で確立する法律に同意した16)。

14）いわゆる暗黒法（黒法とも）（the Black Acts）のこと。（ref: MacDonald, 26; Donaldson, 181; 浜林，131）

15）ベリック条約（Treaty of Berwick）（1586）

16）いわゆる黄金法（Golden Act）のこと。（ref: MacDonald, 37-38; 浜林，131－132 頁）

⑵北の伯たちの謀反とその処分をめぐって

（1593 年、ジェームスによる北部諸侯の討伐）

この協調が長く続く可能性はあまりなかった。しかし、いさかいは意外と早く再燃した。1593 年初め、陰謀が発覚した17)。ハントリー伯18)、エロル伯19)、アンガス伯20)が関わっていた。彼らはそのほかの多くの貴族と同様、決してプロテスタントの教義を受け入れたことはなかった。北東部諸州における彼らの絶大な力が彼らをほとんど難攻不落にした。もしも彼らが放っておかれれば、彼らはスコットランド王のことなどほとんど気にしていないのと同様スペイン王のことなどほとんど気にせずに、自分たちのおかれた境遇に満足していただろう。しかし、牧師たちはカトリックの完全なる撲滅を目指しており、伯たちはスペイン軍の侵入に頼らざるを得なくなったのだ。スペイン軍が来れば、彼らは宗教的な攻撃から解放されるであろう。その宗教は彼らからしてみれば、その教義が受け入れがたいものであったばかりでなく、おそらくそれがもたらす政治的結末21)からも受け入れがたいものであったのだ。ジェームスは陰謀が行われて

17）いわゆるスパニッシュ・ブランクス事件。(the Spanish blanks)。1592 年の終わり頃、ジョージ・カー（George Kerr）というローマ・カトリック教徒がスペインに向けて出帆しようとしているところを発見され、その持ち物からハントリー、エロル、アンガス各伯らの署名の入った白紙の手紙が複数発見された。それ自体は何ら犯罪性を有するものではなかったが、ハントリーたちが以前、スペインのフェリペ 2 世に、無敵艦隊の壊滅を惜しみ、イングランドに侵入する際は援助する旨申し出ている手紙が捕獲されたことがあったことに鑑み、怪しまれ、ジョージ・カーを拷問してみた結果、カーは、イエズス会士によって始められた陰謀のことについて自白し、それによると、スコットランド北部の伯たちが、スペイン軍がスコットランド西部に侵入する際にスペイン軍を助けることになっていたという。そこでジェームスは自らアバディーンに軍隊を率いて向かい、すると、伯たちは逃亡した。伯たちには強硬な処分が期待されたが、ジェームスは本文のあとにあるように、諸般の事情を考慮して寛大な処分を下す。これが長老派教会からは反発されることになる。(ref: Donaldson, 189-190)

18) 6 代目ハントリー伯ジョージ・ゴードン（1561/2－1636）1599 年に初代侯爵に叙爵される。(ref: J. R. M. Sizer, *Gordon, George, first marquess of Huntly*, DNB)

19) 9 代目エロル伯フランセス・ヘイ（bap. 1564, c. 1631）(ref: Concepcion Saenz, *Hay, Francis, ninth earl of Erroll*, DNB)

20) 10 代目アンガス伯ウィリアム・ダグラス（c. 1554－1611）(ref: Allan White, *Douglas, William, tenth earl of Angus*, DNB)

21）それがもたらす政治的結末：おそらく長老主義の平等主義が、上下関係を基調とする封建主義を打破するということか。

いることに気がつくと、すぐに北方に行軍し、伯たちは大慌てで領地から逃げていった22)。

（ジェームス、勝利を存分に利用することを躊躇する）

牧師たちは声を一にして反徒の領地没収とカトリックに対する厳しい措置を求めた。しかし、ジェームスとしてはそのような策をとることに躊躇した。たとえ彼にその意志があったとしても、牧師たちの要望を実行に移す力があったかどうかは疑わしい。たしかに、ハントリーやその同盟者たちに対して従者を率いて戦った貴族たちは、スペイン軍の侵入を不可能にすることには積極的であっただろう。しかし、大貴族の家が滅びていくのはとても満足をもって見ていられなかっただろう。なぜならば、そこに明日の自分たちの姿を見るからである23)。また伯たち自身も、一回の敗北で滅ぼされるような輩ではなかった。彼らの広大な所領の従者は、一人残らず国王に対するよりもはるかに強い絆で彼らと結ばれていた。もしも伯たちの領地が没収されれば、新しい領主は、強力な軍事支援なくして安全に暮らしていけるようになるまで何年も見なければならないだろう。

ジェームスがこうした動機以外の動機に影響されたことはほとんど考えられない。おそらく彼は、牧師たちの勢力とバランスを保つための勢力を粉砕してしまいたくはなかっただろう。そこで彼は、自分の身の回りの廷臣たちの懇願にすぐに耳を貸したのだ。

---

22) ref: Donaldson, 189-190.

23) 原注：「きのうは、私は国王のもとにおり、手紙の返事をもらう予定でしたが、王はそれを私が次に来たときに延期しました。その趣旨はわかっています。それは女王陛下を満足させようと気遣ったからです。しかし、王はスペインの援助をかくも危険な程度まで利用してしまった有力諸侯の意志に対抗する手段を失っています。（中略）この国の貴族に関していえば、彼らは婚姻関係であまりにも互いに密接に結び合っているので、自分がプロテスタントでも、カトリックである相手に対して寛容で、犯した過ちに関してもこれを赦してしまうのです。王に確保されている党派は、牧師、バロン、自治都市民から成り立っており、これらの者と国王は結びつき合っています。なぜならば、突然進路をあからさまに変えられないからです。しかし王は、王と特別の信頼関係にある者の調停によって、秘密の会談を行ったのではないかと疑われています」。ボースよりバーリー宛て 1593 年 3 月 30 日書簡。*S. P. Scotl.* I. 47. （vol. i. 51）

訳注：ref: URL: https://www.british-history.ac.uk/cal-state-papers/scotland/vol11/pp65-76#highlight-first

ボースはロバート・ボース（Robert Bowes）（d. 1597）。（本章 19 頁注 42 参照）バーリーは初代バーリー男爵ウィリアム・セシル（William Cecil, first Baron Burghley）（1520/21－1598）。

伯たちはもう一回戦争を起こさずして倒すにはあまりにも強すぎた。ついにジェームスは、起きたことすべてに関して彼らを全面的に赦免するが、彼らは、スコットランドのほかの貴族たちと同様、プロテスタント信仰を受け入れるか、さもなければ国を出ていくこととした。もしも彼らが国を出て行くことを選ぶなら、彼らは亡命期間中、自らの財産を保持することを許されるとした。

（1594 年、ハントリーとエロル、亡命を強いられる）

そのような裁定の仕方は国王に両派からの怒りを集めた。牧師たちは、カトリックに寛容すぎると激しく非難した。一方カトリックは、それは不寛容な迫害だとみなした。ハントリーとエロルは条件を受け入れるのを拒んだ。そして、アーガイル伯の指揮のもとで彼らを討伐するために送られてきた軍隊を打ち破った。この敗北の知らせを受け取るや否や、ジェームスは再び北方に進軍した。牧師たちは金銭面で彼を助けた。国王軍の勝利は迅速だった。すべての抵抗は瞬時にして打ち砕かれた。伯たちは大陸に逃げることを余儀なくされた。

（国王の勝利の意義）

この勝利はジェームスのスコットランド統治における転機と考えることができるだろう。それは、国民が外国の干渉に対して頑として抵抗するということを決定的に示すものであるばかりでなく、今や国王は、貴族の中でもっとも有力な者でさえも抵抗できないような国民軍を配下に収めているということをも決定的に示すものであった。スコットランド貴族はこれからもスコットランド人の利益にとって強大であり続けるだろうが、それでももはや、自分たちの主君のひげを引っ張ってただですむということはなくなるだろう。

（1596 年、ハントリーとエロルの帰還）

1596 年夏、ハントリーとエロルは再びスコットランドにいた。しかし、今度は彼らは国王に戦争をしかけに来たのではなかった。彼らは、国王へのお目通りがかなうまでさまざまな隠れ場所を転々とすることで満足した。

ジェームスは、彼らからの交渉の申し込みに耳を傾ける気がないことはなかった。伯たちを極限まで追い込むことは、彼がこれまで非常にうまくやってきた平定工作を台無しにしてしまうだろう。彼は、牧師とその支持者以外には誰からもほとんど支援されない‘十字軍’に従事するつもりは毛頭なかった。もしこれをやれば、それはスコットラ

ンド北部全体において彼にアンチ・フィーリングを巻き起こし、さらには、来るべきイングランド王位の継承レースにおいて、彼に少なからずトラブルを起こすであろう。一方彼は、「伯たちは、もはや自分たちの君主と力比べをすることはできないということを学び、これ以降は反逆的な行動は慎むだろう」と考えていた可能性も十分にある。

（フォークランドにおける身分集会）

こうした見解（それは実際に起きた事柄によって正当化され、王は自分を取り巻いている政治家たちから支持された）は、牧師たちからはあまり支持を得られそうにもなかった。8 月の終わり頃、フォークランド24)で身分集会25)が開かれて、いかなる方針をとるべきかについて話し合われた26)。ある一定の牧師たち（国王に対して望ましい意見を述べそうな者たちであったといわれている）が、意見を述べるために招かれた。身分集会に来た牧師の中にはアンドリュー・メルヴィルもいた。彼は招かれていなかったが。彼は当時の長老派のリーダーだった。ノックスよりも狭い精神の持ち主で、精神的な指導者というよりはむしろ体制の護持者であった。彼は、自分は王たるイエス・キリストとその教会の名において来たといった。そして、その目的は、ジェームスと議会をキリストと教会の敵を優遇しているかどで譴責するためであると。その時そこにいた者たちは、そのような異議の申し立てにはほとんど注意を払わなかった。そして、自分の意見を発表した。すなわち、もしも伯たちが国王と教会を満足させるなら、彼らをもとの所領に戻すのがよいであろうと。

（クーパーにおける牧師たちの集会）

起きたことを聞くと、すぐに教会総会の特別委員会（教会総会が休会の間、教会の権益をウォッチするための特別の委員会）は、多くの牧師たちにクーパー27)で集会を開くように呼びかけた。牧師たちはクーパーに集まると、すぐに国王に代表団を送ることに決定した。その代表団は謁見を許された。しかし、代表団が王の前に出て苦情を述べ

24）フォークランド（Falkland）：スコットランド、ファイフ州の自治都市（当時）。

25）身分集会（Convention of the Estates）：一種の非公式な議会のようなもの。（ref:『大内乱史Ｉ』310 頁）

26）いかなる方針をとるべきか：すなわち、伯たちを赦してやるべきか否か

27）クーパー（Cupar）：ファイフ州の自治都市。

始めると、王はそれを制止して、次のように問うた。「汝らは王の許可なくして集会を開く権限があるのか」と28)。

（メルヴィルと国王）

すると、代表団の一員であるメルヴィルが、ジェームスの袖をつかんで、「神の愚かなしもべよ」と呼びかけて、次のように語った。そのトーンは長らくジェームスの耳の中で響き続けたにちがいない。メルヴィルは、スコットランドには 2 人の王と 2 つの王国があるといった。そして、「1 つには王たるイエス・キリストとその王国、教会です。陛下はその臣民に過ぎないのです。その王国の王でもなければ貴族でもない。頭（かしら）でもなければ、ただの一員に過ぎないのです。一方、キリストから呼ばれ、キリストによりその教会を見守り、その霊的な王国を統治するように命じられた我々は、キリストより十分な力を受け、そうする権限29)を有しているのです。集団としてもそうだし、個人としてもそうです。それをいかなるキリスト教国の王も君主も、支配することはできないし、無効にすることもできません。むしろ、強化すべきであり、支援しなければならないのです」と。そして、メルヴィルは次のように締めくくった。「陛下のあらゆる類いの人々から、すなわちユダヤ人、非ユダヤ人、カトリック、プロテスタントから仕えられたいという願望は悪魔的であり、きわめて有害です」と。「陛下はプロテスタントとカトリックのバランスを保とうとしているのであり、それによって両方を支配しようとしておられます。しかし、そのような目論見によって、最終的には双方からの支持を失うでしょう」と30)。

この発言の中には、ジェームスの心に衝撃を与えるだけの十分な真実があった。すなわち、メルヴィルが明るみに出したジェームスの‘目論見’のほうが、寛容のテーマに関するいかなる啓蒙された見解よりも、王の伯たちに対する態度と関係があった可能性はきわめて高い31)。王は今やメルヴィルの迫力を恐れ、伯たちが再び国を離れ、教会を満足させるまでは、いかなることも伯たちのためになされることはないと約束した。

28）暗黒法は、君主の許可のない聖職者の集会をすべて禁止している。（MacDonald, 26）

29）そうする権限：おそらく、集会を開く権限だろう。

30）原注：J. Melville's *Diary*, 368-371. （vol. 1. 54）

訳注：ref: ed. from manuscripts in the libraries of the faculty of advocates and university of Edinburgh, by Robert Pitcairn, *The Autobiography of Mr James Melville, minister of Kilrenny, in Fife, and professor of Theology in the University of St Andrews. with a continuation of the diary* (Edinburgh; Wodrow Society, 1842)

31）つまり、カトリック教徒である伯たちに対するジェームスの寛大な態度は、宗教的寛容の精神から来ているのではなく、カトリックとプロテスタントを均衡させて、その上で

（エディンバラの特別委員会）

10 月 20 日、教会総会の特別委員会がエディンバラで開かれた。彼らは直ちに、スコットランドのすべての長老会に向けて書簡をしたためた。すなわち、「伯たちが戻ってきた。明らかに福音の信奉者を押さえつけ虐殺する目的をもって。おそらく王は、そのような彼らを自己の庇護下に入れるであろう」と知らせた。そして、「かかる上は、各牧師においては、自らの会衆に迫り来る危機の正体について知らせ、彼らを抵抗へと駆り立てるように」と。一方で、教会と王国の危機について協議するために、常設の委員会がエディンバラに設置されることになった32)。このような措置は、それ自体正当化できることであったかも知れないし、正当化できないことであったかも知れない33)。しかし、確かなことは、それは政府に対する公然とした反旗の翻しであったということである。この時から、牧師と王権の訣別は避け難くなる34)。

（国王と聖職者の対立の性格）

歴史家をいまだに悩ませているすべての論争の中で、おそらく、ジェームスと聖職者の対立の問題について 16 世紀からいわれてきたことほど際立って不満足なものはないだろう。「政治的優越を目指す中で聖職者はその分限を超えた」、そして、「この問題の中で不寛容という粗野な精神で活気づいた」というのは簡単である35)。また、「彼らにはジェームスに信頼をおく理由がない」、「彼らの口を塞ぐことは国家レベルでの災難だ。なぜならば、説教壇の自由は、君主の恣意的傾向にチェックを入れる唯一の手段であるからだ」というのも同じく簡単である36)。しかし、事実は以下の通りであったように思われる。すなわち、国王が一方的に勝利することも聖職者が一方的に勝利することも同じように望ましくない一方で、決裂を避けられる妥協点が示されるということは不可能であったということである。スコットランドには、イングランドの下院議会のように両者のバランスをとるものが存在しなかった。一つには国のおかれた社会条件

自分が君臨しようという腹が来ていた可能性が高いとガーディナーは推察する。

32）これを便宜上、「教会総会常設委員会」（略して常設委員会）と呼ぶことにしたい。

33）つまり、暗黒法に反しているので違法な集会であったかも知れないし、一方で、メルヴィルがいうように、神権に端を発した集会であるから正当であるともいえるかも知れなかった。

34） 原注：*Calderwood*, v. 443. （vol. i. 55）

35）つまり、どちらかというと聖職者に批判的な見解。

36）逆に聖職者の肩をもつ見解。

から、また一つには、スコットランド議会は決して二院制に分かれたことがなかったという事実から、議会は単に国王と貴族の道具であるに過ぎなかったのである。そして、もしも聖職者の口が塞がれれば、国民は呼びかけられるための手段を失うのだ。政府の気ままによる以外は37)。

（牧師たちの大義の弱さ）

牧師たちの大義の弱さは以下の点にあった。すなわち、彼らは政治的必要性によってしか正当化することができないもの38)を、宗教的理由によって擁護していた。「教会総会は、ある程度まで実際の下院議会の代用物であった」、「教会の組織は、貴族の途方もない力と国王の浅はかな愚かさに対抗するにおいて計り知れないほどの価値があった」、「説教壇において保持された政治問題に関する言論の自由は、それに対してスコットランドが感謝してもしきれないほどの貢献をした」は、当時の歴史を素直に読んだ者なら誰もあえて否定しようとは思わない命題である。しかし、牧師たちがこれらのことは神から教会に与えられた賜物の一部であるとはっきり言いきったとき、そして、それとは反対の趣旨の人間の法39)すべてを無視してその立場を堅持することを主張したとき、彼らは平信徒社会の諸制度が名誉でもって見られているところならどこでも、必ず反発を引き起こすことになる主張に全面的に肩入れしたことになるのである40)。

（常設委員会との交渉）

ジェームスは平信徒社会の権益の守護者として、このスコットランドにおいて中世ローマ教皇のような役割を果たすと主張する聖職者たちに対して抵抗することが完全に正当化された。しかし、抵抗しても安全だと考えられるようになるまでにはもうしばらくかかった。おそらく彼は、何らかの友好的な取り決めがまだ可能なのではないかという希望にしがみついた。彼は自身の枢密会議のメンバー4 人に命じて、エディンバラの常設委員会の代表団と会談を行わせた。そこで彼の名において、「王は伯たちが教会を満足させるまでは、伯たちもしくはその支持者のために何もするつもりはない」といわせ

37）つまり、国王と聖職者の対立の性格は、後者が生意気だったからではなくて、また、前者が強権的で恣意的だったからでもなくて、その両者を仲介するものが存在しなかったからだというもの。

38）例えば言論の自由、集会の自由。

39）例えば暗黒法。その集会禁止規定。

40）教会が絶対であることを説けば、平信徒社会の中で軋轢を生む。

た。そしてさらに、「もしも教会が、伯たちになした破門の宣告から伯たちを赦免するのが適切と考えるならば、王はまた伯たちに愛顧を与えてよいか」と問わせた。すると、牧師たちはこれらの提案に対してきっぱりと答えた。すなわち、王は伯たちが再びこの国を去るまでは伯たちのいうことに耳を貸すつもりはないと約束したはずだと41)。そして、「伯たちがスコットランドから再び去ったら、教会は彼らのいうことを聞くだろう。しかし、それ以前はだめだ。しかし、たとえ教会が彼らを破門の宣告から赦免することが妥当だと考えたとしても、王は反逆罪のゆえに死刑判決を受けた者に対して愛顧など与えることはできないだろう」と。

41) ref: 本章 15 頁：「伯たちが再び国を離れ、教会を満足させるまで　は・・・」。

⑶ブラックの説教と司法管轄権闘争

（ブラックの説教）

この会談が行われる 2、3 日前、イングランドのスコットランド宮廷における駐在官ロバート・ボース42)は、セント・アンドリュースの牧師の 1 人ディヴィッド ・ブラック43)が、説教の中でエリザベス女王とイングランド教会を侮辱するような言葉を使ったということを知らされた。ボースは当時、国王と牧師の対立の中で牧師を支持する活動を活発に行っていたが、ブラックの行為に関してはこれに抗議するべきだと考えた。彼は、ジェームスもすでにこのことを知っており、ブラックを処罰するつもりでいるということを知った44)。

42）ロバート・ボース（Robert Bowes）（d. 1597）イングランドの外交官。（ref: C. A. McGladdery, *Bowes, Robert*, DNB））

43) David Black (c.1546-1603)　スコットランドの牧師。（ref: James K. Cameron, *Black, David*, DNB）

44）「私はロジャー・アシュトンから、同封の手紙を受け取りました。その中に女王陛下にとって不名誉な内容が含まれています。よって私は、あなたにこの手紙を送ることが私の義務だと考えました。（中略）国王はこの私に対してなされた申し向けに内々に通じており、デイヴィッド・ブラック氏に対してなされた問題を裁くおつもりであると私は認識しております。（中略）この報告をした者の信頼性は大変良いもので定評があると思います。しかし、それでもやはりブラック氏はこれをきっぱりと否定しました。（と私は聞いております。）すなわち、彼は説教壇からもプライベートな場においても女王陛下を中傷するような発言は決してしておらず、身の潔白を証明できるならどんな拷問にも身を呈してよいといっているそうです。それでも、中傷が説教の中で彼によって公然となされたといわれているところを見ると、また、信頼できる証言によって彼が有罪であることが十分に証明できる事情を鑑みますと、私は早急に裁判を行い、これを適法に罰すべきだと考えるのです」。（ボースよりバーリー宛 1596 年 11 月 1 日付書簡，*S. P. Scotl.*, lix. 63）同封された 10 月 31 日付の手紙におけるアシュトンの説明は以下の通りである。「およそ 14 日前、セント・アンドリュースの牧師デイヴィッド・ブラック氏がその説教のうちの二、三の中で（中略）きわめて不遜にも次のようにいいました。すなわち、女王陛下は無神論者であり、イングランドで彼女が公言している宗教は、主教の訓令によって導かれ指示された見せびらかし（？）に過ぎないと。しかも彼女はそれだけでは満足できず、ジェームスに同じものをスコットランドにも取り入れるように説得し、それによって言論の自由を奪うつもりだと。このことは信頼できる人物によって国王に話されました。そして、国王はきわめてご立腹されました。そして、エディンバラに来臨された折に問題を裁くおつもりです」。これらの手紙の抜粋は、ブラックに対する告発が、単に教会の特権に対して攻撃をしかけるための策略ではなく、女王に向けたと考えられる侮辱に対する正真正銘

（国王の要求）

したがって、2、3 日後に枢密会議員が、彼らの提案が牧師たちに受け止められた際の彼らの妥協なき態度について報告したとき、国王は牧師たちの代表団（苦情を述べる目的でその時来ていた）に次のように率直に告げることによって返事をした。「お互いの裁判権の範囲の境界線がよりはっきりと定まるまでは、いかなる良い協定もできないであろう」と。さらに王としては次のように主張した。「牧師は説教をするときは、国家の問題について言及することは慎むべきこと」、「教会総会は、国王に召集されたときのみ開くこと」、「教会総会の決定事項は、国王の裁可を得るまでは有効となるべからざること」、「教会法廷は、本来国法によって裁かれるべき訴訟に対して干渉せぬこと」であった45)。

今日一般に広まっている考えによると46)、こうした要求は、「わかりました。聖職者の独立した地位を放棄しましょう。しかし、その代わり、公平無私によく調べれば、会衆のためになるということがわかる権利を保持させて下さい」という答えによって応じられるか、あるいは、「国家は、私たちが私たちの特権を放棄した場合、それでも私たちは公平に扱ってもらえると期待できるほどまだ十分によく組織化されていません」という答えによって応じられるかであろう。

しかし、16 世紀にはそのような返事は聞かれそうにもなかった。エディンバラの常設委員会は、国王の要求のことについて知ると、自分たちが教会の純粋に霊的な特権であるとみなしているものに対する攻撃に対して、防衛する準備を行った。彼らにとって、教会法廷に対するあらゆる干渉は、ジェームスによってキリストの王国になされた攻撃であった。彼らはその王国の守護者に任ぜられていたのである。我々は彼らを責めることはできない。もしも彼らの論理がおかしくても47)、彼らは、ジェームスがここ

の抵抗であったことを示している。（vol. i. 57）

45）*Calderwood,* v. 451.（vol. i. 58）

46）「今日一般に広まっている考え」とはどのような考えなのかよくわからないが（ここで「今日」というのは、ガーディナーが本書を執筆した 19 世紀中葉のヴィクトリア朝イングランドのことである）、おそらく、教会が国家に殊更に特権を主張するべきでないという考え方だろうか。あくまでも教会も国家の一部である。国家に従ってくれないと困る。（もっとも、教会からしてみれば、やはり自分たちの特別の領域は尊重してくれないと困る。このような、国家と教会の微妙な関係。）

47）ジェームスは、「牧師は説教をするときは、国家の問題について言及してはいけない」、「教会総会は、国王に召集されたときのみ開くこと」、「教会総会の決定事項は国王の裁可を得ること」、「教会法廷は、本来国法によって裁かれるべき訴訟については口を出してはいけない」といった。これらは、「教会の純粋に霊的な特権」に対する侵害といえる

で勝利を収めれば、彼はすぐによりはっきりと彼らの領域といえるところで彼らに対して攻撃をしかけてくるだろうということを本能的に悟った48)。ゆえに、彼らは11月11日の会合で、徹底抗戦することに決定した。その決心は、その前日に、ブラックが11月18日に枢密会議に出頭して、彼が説教で行ったとされる表現について説明を行うことになったという知らせを聞いて、ますます強化された49)。

（ブラック、枢密会議に召喚される）

次の日、常設委員会は、ブラックは自己のケースが国王と枢密会議の前で裁かれるのを断るべきだと決定した。国王は照会を受けて、彼らに次のように語った。すなわち、自分としてはブラックが自分の前に出てきて身の潔白を証明すれば十分だ、しかし、ブラックが枢密会議の裁判権を否定するのを許すつもりはないと。

このような状況下では、衝突は避けがたかった。問題は、両者が等しく権益を有するケースにおいて、片方がもう片方による裁判を認めることによってしか解決されなかった。しかし、どちらの側においてもいかなる妥協案を示されなかった。また、それは実際不可能であった。したがって、11月17日、牧師たちは宣言書を起草した。それは翌日、ブラックによって提出される予定となった。その中でブラックは、委員会の名において、また、彼の名において、抗議を行っている。すなわち、「国王は、説教の中でなされた違反行為に関しては、教会がその告発された牧師の糾弾を決定するまでは、その件について裁判権を有しません」と50)。11月18日、ブラックは枢密会議に出頭し

のだろうか。では、「教会の純粋に霊的な特権」とは何だろうか。むしろ、どちらかといえばまだ外延的な部分といえるのではないだろうか。ジェームスは、国家と教会の関係について彼が思うような関係を作り上げたい。教会の核心にまで踏み込むつもりは少なくとも今の時点ではまだない。しかし、ここで国王の要求を許せば、次は核心部分が本当に襲われるという恐怖は成り立つだろう。

48）つまり、教義に関して難癖つけてくる。（例えば、のちのパース5箇条（1617）。とくにその中で、「聖餐式のときにはひざまずいてサクラメントを受けること」というのは、聖餐式のときにひざまずいてサクラメントを受けることは「偶像崇拝」に当たるとしてこれを絶対的に否定するカルヴァン主義の根幹に反することであった。）（ref: 青柳，197頁；HE3, 222）

49) Calderwood, v. 453.　デイヴィッド・ブラック氏の召喚は1596年11月10日。*S. P. Scotl.* lix. 83.　（vol. i. 58）

50）原注：これは“*in prima instantia*”の自然な解釈であるように思われる。そして、当時流布していた教会法廷の理論に合致している。（vol. i. 59）

訳注：“*in prima instantia*”とは英語に直すと“in the first instance”で「第一審において」という意味。つまり、ブラックはその説教の内容について問われているのだから、彼

て、その宣言書に書いてある通り、枢密会議の裁判権を否定した。枢密会議ではある程度議論が行われたが、この件に関する最終的な決定は 11 月 30 日まで延期された51)。一方、委員会は、すぐにすべての長老会に裁判権否認の答弁52)を送り、エディンバラで決定された方針に対する同意を署名によって証しするように求めた53)54)。

（ハントリーに対して赦されるための条件を提示する）

11 月 22 日、国王はハントリー伯に関して最終的な決断を行った。彼は、伯の勢力全体を撲滅することはあまりにも危険と困難が伴うので、もしも国を永続的に危険にさらすのがいやならば、何らかの条件をつけて折り合いをつけなければなるまいと考えた。ゆえに彼は、「伯がもし教会を満足させることができなければ、伯は 4 月 1 日にこの国から出て行くこと」、「伯は自分の仲間内からすべてのイエズス会士、神父、その他破門された人物を追放すること」、「伯は今後、国の平和を乱すいかなる試みにも従事しないこと」、これらの条件の履行を王に保証できる 16 人の地主を伯は見つけることと要求した。同時にジェームスは、布告を発した。すなわち、万人がハントリーとエロルと交流を行うことを禁じ、軍隊を召集するための準備を行うことを命じた。すなわち、もしハントリーたちが、王が提示した条件を飲むことを拒絶したら、彼らに差し向けるための軍隊を準備するためである55)。

（ブラックのことに関する交渉）

を最初に審査するのは教会であるということか。

51）原注：Record of Privy Council, in McCrie's *Life of Melville*, note KK. （vol. i. 59）

52）裁判権否認の答弁：原文 "declinature"。「（スコットランド法）法廷の裁判権を認めることを断る正式の答弁。とくに、『ある一定の場合において当事者が有している、自らのことを召喚した裁判官の裁判権を司法的に否認する特権』（ベル）」（OED, 'declinature'）つまり、「あなたには私を裁く権利はありません」ということ。（cf. 'declinatory plea': （聖職者の特権を主張しての、審理前の）裁判権否認答弁（研究社・英米法律語辞典 'declinatory plea'））

53）原注：*Calderwood*, v. 460. （vol. i. 59）

54）おそらく 1 通の裁判権否認の答弁書を作成し、それを順繰りにすべての長老会に回し、その署名を求めたということであろう。

55）原注：条項は国王によって書かれた。伯たちに対する布告（1596 年 11 月 22 日）。*S. P. Scotl.* lix. 69, 70. （vol. i. 59）

2 日後、国王は、牧師たちが裁判権否認の答弁を長老会に送り、署名を求めたと聞いた。すると、即座に 3 つの布告を起草するように命じた。最初の布告は、牧師たちが国王の臣民を集めて集会を開くことを禁ずるものであった。2 つ目は、長老会に出席するために出てきた牧師たちに、おのおのの教区に戻ることを命ずるものであった。3 つ目は、その中にブラックに対する新たな召喚を含むものであった。すなわち、ブラックに枢密会議にあらためて出頭し、エリザベス女王に対する非難だけではなく、ジェームス 6 世彼自身とその権威に関する彼のいくつかの軽蔑を含んだ考察について説明するように求めていた56)。

しかし、これらの布告が発せられる前に国王と折り合おうとする試みが牧師たちによってなされた。交渉に 2、3 日間費やされた。しかし、それは決裂した。どちらの側も主要な点で譲ろうとしなかったからである。したがって、11 月 27 日57)、布告は日の目を見ることになった。

（第 2 裁判権否認の答弁）

次の日は日曜日だった。エディンバラのあらゆる説教壇には、キリストの王国を守ることに人々を駆り立てようと全精力を傾注する牧師たちがいた。今やその霊的な司法権が攻撃を受けているのだ。こうした主張が会衆にどのような効果をもたらそうとも、それは王に対してはまったく効果をもたらさなかった。ブラックは 11 月 30 日、枢密会議に出頭し、再び同会議の裁判権を否認したが、同会議は最終判断を下し、それは、教会は反逆や扇動に関して決定することには無関係であるので、同会議としては裁判権否認の答弁を認めることを拒絶するというものであった。

（国王の提案、拒絶される）

これを受けてジェームスは、もう一度呼びかけを行った。もしもブラックが自分の前に出頭して、良心に基づいて、自分が告発された内容について真実を述べるのであれば、彼のことを惜しみなく赦してやろうと。しかし、ジェームスは忘れていた。彼は、自分が正しかろうと間違っていようと大原則のために懸命に戦い、ちょっと赦してやろうかといわれたくらいでは微動だにしない者たちを相手にしていたということを。彼らは国王にいった。「私たちはキリストの福音と王国の自由のために戦っているのです。

56）原注：Proclamations, Nov. 24, 1596, *S. P. Scotl.* lix. 72, 73, 74. （vol. i. 60）

57）原注：Calderwood, v. 465. Bowes to Burghley, Nov. 27, 1596, *S. P. Scotl.* lix. 75. （vol. i. 60）

王がご自分がなさったことを撤回するまでは、戦うのをやめません」と58)。ジェームスは、彼らの意志の固さに少し恐れ入ったようである。枢密会議はブラックを有罪にするための宣誓供述書集めに従事していたが、国王自身は自分が始めた交渉を続けた。そして、翌朝、「ブラックが王の前に出頭して、3 人の仲間の牧師に対して自らのケースに関する事実を宣言すること」という条件で、自らが発した布告の根拠となっている枢密会議の決定を撤回し、ブラックに対する糾弾手続きをやめることに同意した。しかし、ブラックがジェームスの前に出てくる前に、ジェームスは、そばにいる何人かの者の異議によって自分の考えを変えるに至り、「ブラックは少なくともエリザベス女王に対する過ちだけは認めなければならない」とした59)。しかし、ブラックはこれをきっぱりと拒絶した。その結果、交渉は終わった。枢密会議がすぐに召集され、ブラックは出頭して来なかったので、同会議はブラックの有罪を宣告し、あとの処罰を王に委ねた。

（ブラック、テイ川の北側に追放される）

枢密会議の決定が実行に移されるまでには数日かかった。頓挫していた交渉が再び続けられた60)。以前と同じように、両者ともどんなことでも譲る用意はあった。ただし、メインの点61)においてはだめだった。国王もついに忍耐が尽きた。彼は、ブラックにテイ川62)より北への追放を命じた。それからまもなく、エディンバラの常設委員会はエディンバラの町を去るように命じられ、牧師たちは、従わぬ者は聖職者の俸給を没収すると知らされた。

58）原注：*Calderwood*, v. 482.（vol. i. 61）

59）原注：彼は、「少なくとも女王に対して犯した過ちを告白」しなければならない。*Calderwood*, v. 486.（vol. i. 61）

60）国王はなるべく枢密会議の決定に従うかたちではブラックを罰したくなかった？　聖職者とあまり事を先鋭に構えたくなかった？

61）つまり、「枢密会議の裁判権を認めよ（それはすなわち、国王の裁判権を認めよ）」VS「教会の裁判権を認めよ」だろう。（司法管轄権闘争）。

62）テイ川（River Tay）：スコットランドでもっとも長い川。スコットランド西部の山岳地帯に水源を有し、そこから東に流れハイランド地方を横切り、やがて南東に折れ、パース（Perth）の町を通り、そこで感潮河川に変わり、最後にテイ湾（Firth of Tay）に注ぐ。（ref: Wiki, Eng, ‘River Tay’）「テイ川より北へ追放」ということは、スコットランドの北部（未開の地が広がる）へ追放ということだろう。

⑷八人衆とエディンバラの町の騒擾（そうじょう）

（八人衆）

エディンバラの常設委員会が町を去ってからまだ間もない頃、町の牧師たちに国王から新しい提案があった。いかなる状況下においても、それが満足のゆく結果を生み出していた可能性は少ない。しかし、いずれにせよジェームスは、牧師たちを懐柔しようとする再度の試みを公正にはやらなかった。運悪く宮廷の周りには、国王と聖職者との争いに決着をつけることに利害関係を有する者たちがいた。国王はここ数ヶ月間、8 人から成るグループに信頼を置いていた。彼らはその数からいって「八人衆（オクタヴィアンズ）」と呼ばれていた。彼らの運営のもとで財政はある程度正常化しつつあった。それは王室費の大幅な削減によって初めて可能になるものだった。当然の結果として宮廷は、今やすっかり当世風になっていた倹約によって、大幅に収入がカットされ、八人衆の失脚を願う者であふれ返っていた。それによって、より意義のあることに使われるようになった金が、また自分たちのもとに帰ってくるようにするためである。

（廷臣、けんかをあおる）

したがって、廷臣たちの中には、双方の間に広がっていたすでに十分に熱くなっている気持ちに火をつけようとする者がいた。それによって、そのあとに続く本格的大げんかの中で自分たちの利益を上げるためである。彼らは国王に、「エディンバラ市民の中には牧師の居館を夜警している者がおり、彼らはいつでも政府に対して蜂起するつもりです」と知らせた。その一方で、牧師たちには、「これまで起きてきたことのすべての根底には八人衆がおり、カトリックの領主が戻ることを許されたのは彼らを通してのことです」と語った。ジェームスはすぐに罠にはまり、12 月 16 日の夜、エディンバラの主要市民 24 人に町を去るように命じた。廷臣たちは、この命令が発せられたと知るや否や、牧師たちに手紙を書いた。そして、その中で、「その命令はハントリーによって国王から得られたものです」、そして、うその申し立てであるが、「ハントリーはその命令が出される少し前に国王のもとを訪れました」と述べた。

（小教会での会合）

12 月 17 日の朝、ウォルター・バルカンコール63)が説教の中で、何も悪いことをしていないのにかくも多くの者たちが追放の憂き目にあうとはと苦言を呈し、八人衆の主要メンバーを激しく非難した。そして、その場にいた貴族やジェントルマンに、説教が終わったあと小教会64)で牧師たちと会するようにと求めた。彼らが集まると、すぐにエディンバラの牧師の主要メンバーの 1 人ロバート・ブルースが演説を行った。そして、国王のもとに代表団を送り、国王に抗議し、枢密会議員の解任を求めることが決せられた。

（国王に代表団を派遣）

ジェームスは代表団を市庁舎で迎えた。そして、いくつかの先鋭な言葉が交わされたあと、代表団に対して何も答えずに部屋を出ていった。代表団が彼らを送り出したところに戻ってみると、事態は大きく変わっていた。彼らが市庁舎に向かうために教会を出て行ったあと、すぐにとある愚かな牧師が、エステル記65)からハマンの虐殺の話を会衆に読み聞かせることによって、興奮した群衆の心理を乗っ取るのが得策だと考えていた。群衆が話に聞き入っていると、その中の誰かが（当時、一般に信じられた話によると、その者は廷臣に買収されていたという）、「逃げろ！　命を守れ！」と声を上げた。すると、八人衆とカトリック領主の背信的行為のことで頭が一杯だった会衆は、防具を身につけるために教会から走って出ていったのである。

（町で騒動が起きる）

---

63) Walter Balcanqual (1548/9 - 1616)　スコットランドの牧師。ガーディナーは “Balcanqual” と表記している。(ref: James Kirk, *Balcanquall, Walter*, DNB)

64）小教会：おそらくセント・ジャイルズ教会の当時、2 つに分けられていた部分のチャンセル（祭壇周辺の部分）のほうか。セント・ジャイルズ教会は、1581 年に 2 つの部分に分けられた。1 つはチャンセルに当たる部分で、そこは東教会（もしくは小教会、もしくは新教会）と呼ばれた。もう 1 つはクロッシング（交差部。交差廊と身廊が交わる部分）とその他残りの部分に当たる部分で、大教会（もしくは旧教会）と呼ばれた。(ref: Wiki, Eng, ‘St Giles’ Cathedral’)

65）旧約聖書エステル記のこと。ペルシャのクセルクセス王の時代、重臣のハマンは、国内の全ユダヤ人の殺害を企てる。しかし、それは王の后になっていたユダヤ人エステルによって阻止される。結局、ハマンは処刑される。おそらくハマンが八人衆で、プロテスタントの良民を圧迫しようとしていて、そのハマンに対する怒りを八人衆に向けようとしたか。

一瞬にして通りは警戒心に膨らんだ武装した市民で一杯になった。彼らは、自分たちが立ち向かおうとしている危険がどんな危険かほとんどわかっていなかった。あるいは、それに備えるためにどんなことをしなければならないかほとんどわかっていなかった。中にはどうしていいかわからず、市庁舎まで走っていった者もいた。その者たちは、八人衆でもっとも悪辣な者の身柄を引き渡せといった。

（容易に鎮圧される）

そのような騒動は長く続きそうもなかった。市長は簡単にはっきりとした目的をもっていない群衆を説得して家に帰らせた。それをするに当たって、彼は完全に牧師たちから支持を受けた。

（国王の振る舞い）

ジェームスのとった行動に威厳はなかった。彼は、自分の周りで起きていることにすっかり恐れ入ったようである。彼はすぐに牧師たちのもとに人を遣った。（その牧師たちの苦情を彼はつい最近、聞くのを拒絶したはずだが。）そして、牧師たちに、もう一度ホリルードにいる自分のところに代表団を差し向けるように命じた。彼は、騒動が鎮められるや否や、治安判事たちに守られてホリルードの安全なところに向かった。

こうして、その日の夕方、新しい代表団がホリルードへ向かった。一行は請願書を携えており、その中でとくに要求されていたことは、過去5週間に教会に不利な形でなされたことをすべて即刻無効にせよということであった66)。しかし、彼らはジェームスがこのような要求に応じることはほとんど期待できなかったであろう。なぜならば、彼はもはや恐怖の支配下にはなかったからである。その日の午後、彼の取り巻きが、そのように無条件に敗北を認めるような要求に絶対に屈しないように説得したにちがいない。もしも彼が代表団を受け入れて、彼らに「合理的な条件は受け入れる用意はあっても、王権を手放すつもりはない」といえば、彼の行為に対しては何もいえなかったであ

66）過去5週間というと、その日が1596年12月17日だから、11月10日からということになる。とすると、国王が「牧師は説教をするときは国家の問題について言及することは慎むこと」、「教会総会は国王に召集されたときのみ開くこと」、「教会総会の決定は、国王の裁可を得るまでは有効とならないこと」、「教会法廷は、本来国法によって裁かれるべき訴訟には干渉せぬこと」という要求を出したとき（本章20頁）から、ブラックの件に関して教会の裁判権を認めずに国王の裁判権を通し、彼にテイ川より北へ追放という処分を下したこと（本章24頁）などが当たろうか。これらはみな、すぐに解除せよという。まさに国王に無条件降伏を迫るような要求である。

ろう。しかし、彼はそうする代わりにせこい手段を用いた。すなわち、彼はロード・オークルトリーを使って、一行に途中で出会わせようとしたのだ。オークルトリーに一行を怖がらせ、あるいはなだめすかさせて、彼らが任務を遂げないまま帰るように仕向けようとしたのだ67)。

（ジェームス、エディンバラを立つ）

翌朝、ジェームスはリンリスゴー68)に向けて出発した。彼はあとに布告を残した。その布告で彼は、すべての外来者は即刻エディンバラから立ち去るようにと命じていた。また、裁判所の移転も命じていた。彼が前日の騒動を利用して聖職者と彼の問題を終局に持ち込もうとしていることは明らかだった。彼が本来は大したことのない事柄を最大限に利用しようと決めていたことは間違いない。しかし、彼が一般に考えられているように何らかの非常に深い、偽善的な政策に影響されていたという可能性は少ないだろう。ジェームスにとって前日の騒動は、あれから長い年月を経た今日の私たちにとってよりも、はるかに大きく映っていたにちがいない。そして、たとえ彼が、真実をあまり彼に知らせたがらない取り巻きに囲まれていなかったとしても、彼は自然と、牧師たちは実際よりもはるかに直接的な役割をあの騒動で果たしていたと考えたであろう。牧師たちがその後とった方針は、たしかに彼からその誤った考え69)を正すような方針ではなかった。彼らはロード・ハミルトンに手紙を書いた。ハミルトンは、兄の発狂の結果、クライズデールという重要な地区を支配する大家（たいけ）の統領になっていた。彼らはそのハミルトンにエディンバラに来るように求め、自分たちの統領になってくれるように頼んだ。翌日、ロバート・ブルースが渾身の力を込めた説教を行い、教会を攻撃する者たちを非難した。別の牧師が国王個人に対して激しい批判を行った。その結果、12 月 20 日、エディンバラの治安判事たちは、町の牧師たちを何人かの市民とともにエディンバラ城に囚人として収監するように命令を受けた。その目的は、彼らに例の騒動のあった日の彼らの行状について説明させるためであった。ブルースとほかの数人の牧師は、彼

67）*Calderwood*, v. 502-514.　*Spottiswoode* (Spottiswoode Society's ed.), iii. 27, 32. Bowes to Burghley, Dec. 17, 1596, *S. P. Scotl.* lix. 87.　(vol. i. 64)

68）リンリスゴー（Linlithgow）：エディンバラより西に 24 キロメートルほど離れたところにある町。リンリスゴー宮殿があった。（ref: Wiki, Eng, 'Linlithgow'）

69）その誤った考え：つまり、実際には牧師たちはその騒動にはあまり関わっていなかった。それは「とある愚かな牧師」の扇動によって始まったもので、牧師たちは、全体としては騒動の鎮圧を支持した。しかし、ジェームスには牧師たちが率先して騒動に関わったように思えた。しかし、その後牧師たちがとった方針は、ジェームスからその誤った考えを払拭させるようなものではなかった。

らに敵対する者たちの手の内では公正な裁判など望めないことがわかっていたので、安全な場所へ逃亡した70)。まもなく枢密会議は、当該騒動は反逆行為だったと宣言した。同時に国王も宣言書を発して、それにすべての牧師が署名するように求めた。従わなければ俸給の没収だった。牧師たちはその宣言書に署名することによって、民事、刑事すべての訴訟において、とりわけ反逆罪と扇動罪が関わる問題において、国王の裁判所に服することに拘束されることになるというものだった。

（エディンバラの町を降伏に追い込む／1597 年）

ジェームスは、少なくとも物理的力は自分のほうにあるということを示そうと決めていた。スコットランドにおいて、牧師の主張に眉をひそめない貴族はほとんど 1 人もいなかった。国王はまもなく、あらゆる反抗を排除する軍隊を自分の命令下に置いた。1597 年 1 月 1 日、彼はエディンバラに入城した。そして、町の人々の降伏を受け入れた。続いて高教会71)に行くと、プロテスタントを支持する決意であることを宣言した72)。しかし、同時に彼は、先の騒動に加担した者たちを赦す意図を宣言することは控えた。そして、彼らを反逆罪の告発がかかったままにした。

70）*Calderwood*, v. 514-521 ; *Spottiswoode*, iii. 32-35. （vol. i. 65）

71）高教会（the High Church）：おそらく、セント・ジャイルズ教会のこと。

72）つまり、彼はカトリックびいきではないかという疑念がふりかかっていた。それをあらためて払拭した。

⑸聖職者との衝突を避けるための仕組みづくり

（国王の置かれた状況の難しさ）

牧師の抵抗を押さえつけることはあまり難しくなかった。しかし、将来においてこのような衝突が起こらないようにするスキームを作り上げることは決してそれほど簡単なことではなかった。実のところ、対立の再燃を防ぐ方法は 2 つしかなかった。1 つは、もしもジェームスに十分な力があるのなら、廃止された主教制を復活させればよかった73)。言い換えれば、牧師たちが属している世界の者の力を使って、牧師たちを黙らせ従わせることをもう一度試みればよかった。もう 1 つは、しばしばこのような提案がなされてきた。すなわち、教会の代表者を、王権から派生する称号や管轄権を与えずに、議会の審議に参加させることを許すための提案である。議会はこうしてイングランドにおいて同じ名前を冠する機関にある程度近づいていくことが期待されることになるだろう。それによって議会は、国のすべての社会的グループに十分な活躍の場を与え、貴族と聖職者の間の仲介をする中で王権を支えていくことができるようになるだろう。

（リンジー・オブ・バルカーズの方策）

このあとのほうの方策は、国務長官ジョン・リンジー・オブ・バルカーズが推している方策として利があった74)。彼は間違いなく当時のスコットランドでもっとも有能な政治家だった。彼は、牧師たちの独立した地位の要求に断固として反対していたが、一方で、上級貴族たちの同じように法外な要求に対しても断固として反対していた。小規模な地主ジェントリーの代表が議会に入れたのはまさに彼のおかげであった。彼は、彼らを入れることによって、大封建貴族の統領たちの票とある程度まで釣り合わせることを期した。それと同じような気持ちで今彼は、教会の代表者が、国民的関心のある問題について話し合うために議会に召集されるメンバーの中に加えられるようにしようと思ったのである75)。

73）黄金法（1592）の成立によって長老制教会の制度が認められ、主教制はいったん廃れていた。（ref: 木村，176 頁；MacDonald, p. 47）

74）原注：彼が高位聖職者の復活を不可能にする方策に関連してこの方策を提起したということは、主教制を導入するための隠れ蓑としてそれを推奨したわけではないことを明らかにしている。*Calderwood*, v. 420.　（vol. i. 66）

75）原注：もっとも難しい問題は、厳格な長老派聖職者にあったと一般に考えられている。それでもそれは、もしも「議会における教会の代表者は常に平信徒でなければならない」という条項があれば（そして、そういう条項はそれ自体が望ましいことであるが）、

（成功する見込みは少なかった）

それでも、この方策は一見もっともらしく見えるが、果たして満足のゆく結果を生み出していたかは大いに疑わしい。たしかに今、スコットランドを苦しめている悪が、単に国の制度の欠陥の結果に過ぎないとしたら、互いに独立して立法を行っているといえる２つの議会に当たる機関76)の統合ほど、成功する可能性のあるプランはなかったであろう。しかし、実は真実は以下の通りであった。すなわち、その２つの議会は、実際には１つの国に住む２つの異なる人民のリーダーたちの集まりであった。そして、彼らを一緒に働かせようとすることは、破滅的な結果しかもたらさないであろう。しかし、もしもジェームスが実際とは異なる人物であったならば、そして、治世の初めから同情的ではあるが無限定ではない協力を牧師たちの大義に対して与えていたならば（牧師たちの大義は宗教に関わる大義であるばかりでなく、良き秩序を目指す大義でもあった）、彼はその２つの異なるグループに属する臣民を効果的に仲裁することができたかも知れない。たとえば、もし彼がオランダ共和国の偉大な創始者77)のような人物であ

彼らが抵抗したとはあまり考えられない。1599 年にホリルード・ハウスで開かれた会議で次のようなやり取りがあった。「『牧師でなければ誰がカークのために投票するのか』という質問があった。すると、その答えは『それは牧師よりもむしろ長老とか助祭の職と適合するだろう。彼らは教会よりの委任状をもち、そして、自分たちの行為を教会総会に報告する義務をもつ。そして、我々は教会にほかのいかなるものにも負けないくらい特権を享受させるつもりだし、陛下を満足させ、公共の福祉に役立ちたいと思う。ただし、神の礼拝とその民の救済という霊的な務めの害にならないようにである』というものであった」。（Calderwood, v. 752）一方、1592 年、長老制のシステムを確認する法律が通過したときに、イングランドの駐在官は手紙に次のように書いている。「さまざまな法律が教会のためにつくられました。しかし、議会において投票権をもちたいという牧師たちの願いは拒絶されました。彼らはそのことを真摯に要求したのですが。なぜならば、（教会のために議会に席を占めている）高位聖職者の世俗財産が今や打ち立てられ、世俗貴族や俗人のもとに置かれることになったからです。そして、残っている高位聖職者の数は少なく、議会において教会のために働くには十分でないからです」と。（ボースよりバーリー宛 1592 年 6 月 6 日付書簡、*S. P. Scotl.* xlviii. 44）もしも牧師たちが、国王は敬虔にふるまっていると確信することができたならば、真の困難は貴族から生じるものであっただろう。（vol. i. 66）

訳注：ref: 飯島,「スコットランド長老派教会の成立に関する一考察」240 頁

76) 2 つの機関：すなわち、スコットランド議会と教会総会。

77）オランダ共和国の偉大な創始者：オレンジ公マウリッツのことか。彼だったら、ホマリス派の厳格な宗教指導者たちをなだめすかすことができただろう。ジェームスもそれく

ったならば、彼が牧師たちに「北の伯たちについては、政治的な理由によって、あなた方が望むようには彼らを扱えないのだ」といえば、牧師たちは少なくとも彼のいうことに敬意を払って耳を澄ましていたであろう。とにかく、「国王は心の中では牧師の政治的主張に対してだけではなくプロテスタンティズムに対しても敵なのだ」という、たとえどんなに根拠があやふやでも決して不合理とはいえない仮定によって、疑わしき権利を愚かに主張するという方向には突き動かされなかったであろう。

（ジェームスの苦境）

しかし、実際はちがった。ジェームスは満足のゆく脱出方法がない状況に陥っていた。彼は一歩一歩引っ張られていって、当初、自分の権力に対する浸食を抑制する目的で乗り出した企てから、死ぬ前には、自分自身が聖職者の領分を深く浸食し、のちに自分の息子を席巻することになる大旋風のもとをつくるまでに至ったのだ78)。

（北部の牧師たち）

すぐに明らかになったことは、貴族と牧師が議会で一緒にやっていけるようになる前に、克服すべき問題がたくさんあるということだった。牧師から変革の同意を得ることは容易なことではなかった。彼らはごく自然と「国王の提案の裏には何かある」と疑っていた。よって、教会総会の同意を得る唯一のチャンスは、策略に訴えるということであった。教会総会の性格は、それが開かれるところの地域性に影響されるということがよく知られていた。というのは、遠路はるばるやって来られるほどの余裕のある牧師は非常に少なかったからだ。したがって、ジェームスはパースに総会を召集した。それは北部の牧師たちが参加しやすくするためであった79)。北部の牧師たちはこれまで一度も、南部の牧師たちを活性化させている感情を共有したことがなかった。そして、一般に厳格な長老派からは無知で学問がない者と見られていた。しかし、今回は、彼らに国王の味方につこうと思わせる特別の理由があった。たとえ彼らがエディンバラやセント・アンドリースの知的な活動からある程度遮断されていたとしても、彼らはそれらの地の牧師よりもはるかによく北部の伯たちの力を実際的に知っていたのである。もしも本当にハントリーとエロルから所領を没収することがプロテスタントの大義のために役

らいであればよかったということか。しかし、実際はちがったということ。

78）つまり、王権と教会との間にちょうどいい関係がつくれなかったということか。

79）パース（Perth）はエディンバラより北。ハントリーの所領のあるアバディーン周辺から来やすい。また、エロルの地からも来やすい。

立つのなら、彼らは喜んでそれに賛成したことは疑いがない。しかし実際には、彼らは、そのような決定を実行に移そうとすることによって地域が陥るかも知れない混乱の、自分たちが最初の犠牲者になることがよくわかっていたにちがいない。よって、彼らは国王の権威を支持する用意があったのである。それが彼らにとって、将来の静かな生活をもっともよく約束するものだったからである。

（パースの教会総会）

1597 年 2 月 29 日、教会総会がパースで開かれると、国王は北部の牧師たちが自分たち独自の結論に至りつくのを放っておくことで満足したりはしなかった。彼は廷臣を使い、彼らにお世辞をいわせ、褒めそやさせたりした。牧師たちは、「今こそエディンバラの教皇たちに抵抗するべき時ですぞ」などといわれた。彼らは国王とともに個室に閉じ込められ、国王はあらゆる弁を尽くして彼らを味方に引き入れようとした。その結果は、最初の重要な課題が総会に提示されるや否や、すぐに見えてきた。すなわち、「総会は合法的に召集されたものであるか否か」と問われた。厳格長老派が「否！」と答えた。それは国王によって召集されたものだからである。しかし、それにもかかわらずその問いかけの答えは、「合法的に召集されたものである」に決した。

この点にかたがつくと、ジェームスはすぐに 13 箇条の提案を行った。彼はそれに対する回答を行うように総会に求めた。議会における投票権の問題はまた別の機会に譲った。しかし、彼は、将来の総会において教会の外的統治80)に関して変更点を提案することの許可を得た。また総会は、「いかなる牧師も、まず改善を求めてそれがなされないことがはっきりするまでは、国王の行為に関してこれを批判してはならない。また、一定の例外を除いては、説教壇から名指しで誰かを非難してはいけない」ということにも同意した。さらに牧師たちは、臨時の集会を開くことも禁止された。そして、モリーおよびアバディーンの長老会に、ハントリー伯と交渉することの許可が与えられた。伯はあまり積極的ではなかったが、プロテスタント教会に入ることの許可を求めていた。

かくして国王は、彼と牧師の間に現在存在する問題の大部分に関して、彼が抱いている見解に対しての総会の同意をとった。しかし、宮廷の影響力によって得られた議決では、それによって拘束される人々の尊敬は到底勝ち取れなかったであろう。そして、メルヴィルやブラックのような者たちがこの総会を、単なる総会ごっこに過ぎないと評価

80）外的統治：内的統治というのは、聖職者でないとわからないプロフェッショナルな問題に関するマネージメントのことだろう。外的統治とは、宗教的核心以外の教会の運営に関するマネージメントのことだと思われる。ジェームスは、教会の代表が議会に入ることを目指している。

するのをやめるとしたら、それはこのように国王の行為にかぶせられた合法性のまといによってではなかった81)。

（ダンディーの教会総会）

2ヶ月後にもう1度、ダンディーで総会が開かれた。今度もだいたい同じグループから成り、同じような精神で活気づいていた。総会はハントリー、エロル、アンガスの帰順を認めることに同意した。そして、彼らを破門の判決から赦免することに許可を与えた。また、主要牧師のうちの一定の者に委任状を与え、その者たちが牧師の俸給問題に関して国王の代表と交渉を行い、また、教会に関わるあらゆる問題に関して国王にアドバイスを行うことに同意した。この委任はずっとあとになって、主教制の導入の最初のステップと見なされた。しかし、当時ジェームスがそのような意図を抱いていたかは疑わしいだろう。現在では、彼の願いは、彼の権威を保つための手段の発見に限られていたように思われる。彼の過去2回の教会総会体験は、彼に目的を達成するとしたら、個人の影響力を使っていたほうが、教会統治の既存のシステムを変更するよりもはるかに効率がいいということを教えていただろう。

（伯たち赦免される）

6月26日、3人の伯はアバディーンにおいて破門を解かれた。その際、彼らはおそらく内面では抵抗感があったに違いない教義に対して帰依を宣言した。たとえ彼らがどんなに俗世間における処罰から解放される必要性があったとしても82)、このような偽善

81）原注：Melville's *Diary*, 403-414. *Book of the Universal Kirk* (Bannatyne Club), 889. (vol. i. 69)

82）ここで伯たちの事件の経過について整理しておきたい。

1. 1593年初め、陰謀発覚。ハントリー伯、エロル伯、アンガス伯の関与。ジェームス、すぐに北方に行軍し、伯たち逃亡。（本章 11 頁）
2. 伯たちの処分。牧師たちは領地没収を主張。しかし、ジェームスは躊躇。結局、「伯たちを全面的に赦免するが、その代わり、プロテスタントに改宗すること。さもなくば、国外追放」とする。（同 12－13 頁）伯たち、条件を受け入れることを拒む。伯たち、国外へ逃亡。（1594年）（同 13 頁）
3. 1596年夏、ハントリーとエロル、スコットランドに戻ってくる。国王と和解するため。ジェームスもまんざらでもない。（同 13 頁）
4. 8月末、フォークランドで身分集会。どうすべきかが話し合われる。牧師も招かれる。（ただし、国王にとって望ましい意見を言いそうな者たち。）「もしも伯たちが国王

的なシーンを支持することをためらった牧師たちは、これら推測上の悔悛者たちにこのような屈辱的な服従を強いた国王とは対照的な存在であった。

翌月、エディンバラの牧師たちは再びその説教壇に立つことを許された。町はその少し前に、12 月 17 日の騒動の赦しを受けていた。もっとも、高い罰金を支払わされて初めて実現したことであったが。

（王国の状況）

と教会を満足させるなら、彼らをもとの所領に戻してもよいだろう」。（同 14 頁）

5. 教会総会の特別委員会がクーパーで牧師たちの会合を開く。国王に代表団を送ることがすぐに決まる。その中にメルヴィル。メルヴィル、国王に強硬に意見。国王、気圧されて、「伯たちが再び国を離れ、教会を満足させるまでは、いかなることも伯たちのためになされることはない」と約束。（同 14－15 頁）
6. エディンバラで教会総会の特別委員会が開かれる。（1596 年 10 月 20 日）すべての長老会に、「伯たちが戻ってきた。福音の信奉者を虐殺する目的で。国王は彼らを庇護下に置く模様。各牧師においては会衆にそのことを知らせ、抵抗運動へ駆り立てるように」と声明。教会と王国の危機に対応するために同地に教会総会の常設の委員会が置かれる。（同 16 頁）
7. 国王、枢密会議員を指名して、常設委員会の代表らと会合を行わせる。国王側は、伯たちが教会を満足させることができれば、王はまた伯たちを優遇できるかと質問。教会側は、「まずは、伯たちは国を出て行け。そうすれば、伯たちのいうことに聞く耳はもつ」と応答。また、たとえ赦免しても、王が反逆罪を犯した彼らを優遇することは疑問だと指摘する。（同 17－18 頁）
8. 1596 年 11 月 22 日、ジェームス、ハントリーに対して最終的な決断。赦されるための条件を提示する。「伯がもし教会を満足させることができなければ、伯は 4 月 1 日にこの国から出ていくこと」、「伯は自分の仲間内からすべてのイエズス会士、神秘ほかを追放すること」、「国の平和を乱すようなことはしないこと」を提示。（同 22 頁）
9. 廷臣が八人衆を失脚させるために、ハントリーなどカトリック領主のことを利用する。（1596 年 12 月）（同 25 頁）
11. 国王、パースで教会総会を開く。（1597 年 2 月 29 日）モリーとアバディーンの長老会にハントリー伯と交渉することの許可が与えられる。（同 33 頁）
10. ダンディーの教会総会、ハントリー、エロル、アンガスの帰順を認める。破門から赦免することに同意。（同 34 頁）
11. 1597 年 6 月 26 日、3 伯、アバディーンにおいて破門を解かれる。プロテスタント信仰への帰依を宣言。以後、おとなしい臣下になる。（同 34－35 頁）

ジェームスは今や確固たる基盤の上にその権威を築いたかのように見えた。ハントリーや大貴族は、おとなしい臣下となることを余儀なくされた。亡命者が帰還しても牧師たちが予言していたような結果は起きなかった83)。この時からもはや、外国勢力と組んで君主制を打倒しようとする陰謀の話は聞かれなくなる。教会もまた、あまり綿密に検証されては耐えられないような方法によって84)、そのもっとも法外な主張のいくつかを放棄させられた。そして、あたかもスコットランドには平和な日々が待っているかのようであった。

---

83)「伯たちが戻ってきた。明らかに福音の信奉者を押さえつけ虐殺する目的をもって。（後略）」（本章 16 頁）

84）ジェームスは、自分に味方しそうな牧師が多く来そうなパースの地を選んで教会総会を開き、そこで自分の主張を押し通した。教会は、いくつかの自分たちの特権と称していたものを放棄した。（本章 32－33 頁）

⑹聖職者の代表を議会の審議に参画させる試み

（聖職者は議会において投票権をもつべきだという提案）

すべては、ジェームスが牧師のために議会に投票権を得るための措置にとりかかるときの心がけと、彼の努力がどれだけ報われるかにかかっていた。1597 年 12 月 13 日、議会が開催され、前回の教会総会で指名された委員85)が、教会が将来の議会において代表をもてるようにと請願した。（委員たちが国王と折り合いをつけていたことは間違いない。）しかし、彼らはここで意外な障害に直面した。議会に座している有力者は、自分たちの討論の場に牧師の集団が割り込んでくることを許容することに必ずしも積極的ではなかった。たとえ、教会集会に対して責任をもつ平信徒が代表になってもだめだった。提案に賛成したくはなく、かといって国王を不興に陥らせたくもなく、有力者たちは、国王によって主教や修道院長、あるいはその他の高位聖職者に任ぜられた者が、議会に議席を有することを認める法律を通過させた。しかし、そのような法律は請願の内容とは真っ向から対立するものであった。委員たちは牧師の代表が議席をもつことを求めていたのだ86)。結局、議会は 2 つの階層に議席をもつことを許した。1 つは、教会財産をもつことができるようになるために教会の称号を受け入れた平信徒。もう 1 つは、国王によって指名され、自分たちの仲間とは全然気持ちを共有する必要のない牧師である。当時、「この法律に賛成した者は、『牧師は誰も国王から主教職なんか受け付けないであろう』、『こうすることによって、このいやな問題を永遠に棚上げできる』と信じて同意するように誘引されたのだ」といわれた。と同時に、次のような点もわざわざ指摘されている。すなわち、「彼ら87)の願いは、新しい主教が（もしもそういうものが本当にできたなら）、『国王は主教のスピリチュアルな事柄に関わる政策および教会統治に関して、主教によって行使されるべき職責について、教会総会と交渉すべきである』と立法されることによって、何らかの類いの管轄権を行使するように用いられるべきであるというものである」と88)。

（1598 年、ダンディーの総会）

85）前回の教会総会：ダンディーの総会。（1597 年 5 月）（本章 34 頁）「主要牧師のうちの一定の者に委任状を与え」

86）牧師（ministers）と、主教・大主教・修道院長・その他の高位聖職者（prelates）ではちがう。

87）彼ら：この法律に同意した者たち。

88）原注：*Acts of Parl. Scotl.* iv. 130.（vol. i. 71）

1598 年 3 月 7 日、ダンディーで再び教会総会が開かれた。これまでと同じように、牧師たちが宮廷の政策を支持するように説得するためにあらゆる影響力が行使された。しかし、そこにいた者たちの中で、一人手に負えないことで有名な者がいた。アンドリュー・メルヴィルは、彼の義務を遂行する中でいかなるものにも誘惑されなかったし、恐れさせられもしなかった。したがってジェームスは、メルヴィルが総会の討議に加わることを妨げるために、あまり直接的ではない方法で措置をとった。

（メルヴィル、総会に出席することを禁止される）

前の年の夏、ジェームスは自らセント・アンドリースに出向いた。そして、彼の影響力のもとで新しいルールがつくられていた。それは、「大学の教師は、牧師としての仕事を同時にもたない限り、すべての教会集会に参加することを禁止される」というものであった。ジェームスは今やこのルールの効力によって、メルヴィルが座を占めることを許可することを拒絶した89)。

（国王の提案、許可される）

国王が主張を通すのに反発がないわけではなかった。彼は自分が望んでいるものは、カトリック教会風の司教やイングランド教会風の主教ではないといった。彼は、聖職者の中でもっとも賢く最良の者が枢密会議の、そして、議会の討議に参加することを望んでいるといった。それは、彼らが教会を代表して発言できるようになるためであると。ジェームス自らが討議に参加して、自分の地位をアンフェアーに利用して、発言している者を途中で遮ったり、あらゆる反対を却下した。ついに総会は僅差で、「51 人の教会の代表が議会において投票権を得るべし」と決定した。この 51 人の選抜は、一部は国王に、一部は教会に帰属することとなった。彼らは、今はこれ以上詳細に立ち入るべきでないと考えた。将来の代表によって占められるべき正確な地位については、個々の長老会（中会）、シノッド（大会）にその検討の機会が与えられることとなった。また、あとで集会が開かれることに決まった。そこには各シノッドから指名を受けた 3 人、6 人の大学の博士が出席することとなった90)。しかし、そこでの決定が教会の代

89）メルヴィルは 1590 年にセント・アンドリース大学の学長に就任したが、とくに牧師職にはついていなかったらしい。

90）シノッドはたぶん 5 つある。Synod of Lothian and Tweeddale, Angus and the Mearns, Moray, Aberdeen, Fife である。（MacDonald, 76）よって、各シノッドから 3 人だと合計

表のポジションに関する最終的なものになるのは、集会がそこに提出される各論点について満場の一致になるという非常に稀有な場合のみであった。もしも意見の相違が起これば、報告書が次の総会に向けて作られ、そこで問題が取り上げられることとなった。

（フォークランド集会）

かくして 1598 年 7 月 25 日、フォークランドで集会が開かれた。そして、代表者は、1 つの空席につき教会によって国王に提出された 6 人の名簿の中から国王によって指名されることとなった。代表者は選ばれたら、その行動につき教会総会に責任を負うとされた。また、総会の明確な認可がなければ何も議会において提案できないものとされた91)。しかし、全会一致とはならなかったので、最終的な決定は次回の教会総会に委ねられることとなった。

このスキームが、当初議会によって提案されたものとはまったく異なるものであることは明らかである。集会が合意したものは、世俗の貴族を抑えることができる集団を議会に入れることであった。議会が合意したことは、牧師を抑えることにおいて国王と貴族を助けることのできる集団を議会に入れることであった。これら 2 つのプランの間で、今やジェームスは決定することを求められた。我々が判断できる限りにおいては、ジェームスはこれまで、「自分は主教制を復活させるつもりはない」と宣言した通り、本当にそのようなつもりはなかったと思われる。ジェームスはいかなる時でも秘密を長く保つことができなかった。もしも彼がうそをついていたのであれば、必ずや本心があちらこちらで顔を出していたであろう92)。とにかく、それがどうであれ、彼は教会総

---

15 人が集まることになる。また、大学の博士とは当然、神学博士だろう。つまり、神学的知識の専門家である。

91）原注：*Calderwood*, vi. 17. （vol. i. 73）

92）原注：どちらの見解に関しても明らかな証拠はない。しかし、次の年、ニコルソンがイングランド政府に送った急送公文書において、ジェームスの主教制再構築の計画について触れている頻度に鑑みると、それよりも早い時期には彼はそのことについて全然触れていないので、我々は、「1598 年の秋まではジェームスはそのような計画を抱いていなかったのではないか」という強い憶測を打ち立てることができそうである。この問題が 1597 年の議会に出てきたときに書かれた手紙における次の一節は興味深い。「同じ日、スコットランド教会によって与えられた提案が再び扱われました。国王は、彼らに満足を与えることに積極的だったようです。だから、彼らはそのことを説教壇やその他の場所において感謝しています。しかし、枢密会議は彼らに反対していました。『もしも彼らが議会と枢密会議に議席をもつのであれば、何らかの高位聖職者の名称によって、何らかの称号をもつことが国王の名誉にとってふさわしいことであろう。そうすれば、彼らは人々の間でも

会から 51 人の代表を議会に招くために、わざわざそのような面倒なこと93)をしなかったことは確かだ。彼がねらっていたことは、国王と教会との間で司法管轄権の摩擦があったケースにおいて、議会の決定に重みを加えるような者たちを議会に入れることであったのである。そして、一定数の代表が終身で選ばれれば、自分はその目的を達成できるだろうと彼が考えていたことは驚くに当たらない。何らかの確定的プランをジェームスによるものだとすることが許される限りにおいて、おそらく彼は、こうして強化された議会が、教会のすべての外的な問題に関して、彼が自分の裁判権を維持することを支持することを期待したのであろう。（一方、すべての純粋に教会的な問題に関しては、これまで通り、教会総会に委ねられるだろう。）

評価が上がるだろう』といって。そして、『イングランドの女王が誰かをその賢さのゆえに自分の枢密会議に呼ぶときは、彼女はその者に敬意を表してナイトか何かの称号を付与した。だから、何らかの高位聖職者の称号なくしては、彼らが枢密会議の場に座を占めることは似つかわしいことではないだろう』といって。それゆえに、『牧師たちはそういうやり方によっては称号や地位を受けないだろう』と考えております。しかし、国王は、貴族はそうでもなければ彼らの提案に同意しないであろうとみて、彼らにその提案を拒絶しないように求めました。その点について彼らのために中間を見つけることを約束して。（中間とは真ん中、つまり、妥協点という意味でしょうか。）その点につき彼らは、教会総会と協議できるようになるまで、その問題を自分たちの選択のうちに残しておくことにしました」。ニコルソンよりセシル宛て 1597 年 12 月 23 日，*S. P. Scotl.* lxi. 65.（vol. i. 74）

訳注：「どちらの見解」とは、「1598 年 7 月 25 日のフォークランド集会が開かれた時点で、ジェームスはすでに主教制を復活させようという意図をもっていた」という見解と、「その頃はまだもっていなかった」という見解である。ガーディナーは後者の見解。　　）

93）そのようなこと：つまり、本当は主教制を復活させるつもりなのにそんなつもりはないといって、聖職者を安心させて、議会に代表を来させようとすること。

⑺ジェームス、主教制の復活に傾いていく

（ジェームス、主教制の復活を考える）

ジェームスができる最良のことは、フォークランド集会のスキーム全体をあきらめて、もっといい機会が来ることを待つことであっただろう。貴族と牧師との間に存在する不信感、および、彼が牧師からほとんど信頼されていないということが、彼の懐柔的な提案を実行不可能にしていた94)。確かなことは、フォークランド集会のスキームは、議会によっては決して認められないということであった。たとえ認められたとしても、それを正常に機能させることはおそらくできなかったであろう。賢くて意志の固い政府が、国民の二重代表95)が煩わされている問題を克服することができる時がいつか到来するかも知れなかった。しかし、その時はこれまでのところまだ到来していなかった。

ジェームスがそのような時が来ることを予見して何かを行うつもりであったという可能性はあまりない。彼はだんだん議会によって提案された措置に引きつけられるようになっていった。そして、聖職者をひざまずかせることが唯一可能な手段として、主教制の復活を望むようになっていった。教会制度としての主教制に関しては、彼は少なくともこの頃はまだ共感していなかった。彼は主教制を、牧師を統率していくための手段くらいにしか見ていなかった。そして彼は、この目的のために自分が任命した官吏に教会の称号を与えるというまさにその事実によって96)、ある種の誘惑を自分のために準備しているということが見えていなかった。すなわち、自分の領域を超えている厳密に教会に関わる問題にやがて干渉していきたいという気持ちに駆られるのだ。彼はこれまでのところ、少なくとも政治家の努力に値する目的を追求してきた。しかし今や、もっとも賢い政治家でも間違いを連発することが必至の道に入り込みつつあったのである。

（バシリコン・ドロン）

94）つまり、聖職者の代表を議会に取り込むことにより、聖職者の勢力をコントロールできるようになろうとすること。そのための提案。

95）国民の二重代表：議会も国民を代表していたし、教会総会もある意味、国民を代表しているといえた。この 2 つの機関が並存することの難しさ。（本章 8 頁参照）

96）ジェームスは、1600 年 10 月にアバディーン、ロス、ケイスネス各管区に牧師を主教として任命する。「主教」という名称はもっているが、実際には牧師に過ぎなかった。（Donaldson, 202 ; MacDonald, 94）

ジェームスがこの問題に関する自分の考えを最初に著したのは、『バシリコン・ドロン』を準備しているときにその中でであった。彼はその著書を息子の教育のために、その年（1598 年）の秋に起草した97)。また彼は、その著書を公に知られないものとすることを意図していたので、そこには彼の本心が現れていると考えてよいだろう。この本の中で、彼は、できれば主教制を再導入することによって、牧師を制御したい自らの願望のことについて語っている。

（1599 年）

次の年（1599 年）、彼が牧師は説教壇で国事についてどれくらい言及できるかについて、ブルースやエディンバラの牧師たちと年来のいさかいを再燃させて、それに再び苛々とさせられたときも、やはり同じように強くその願望を抱いていただろう。と同時に、彼の行いは重大な疑念を呼び起こした。本の存在を秘密にしておくことがもはや無理になったとき、『バシリコン・ドロン』に著された彼の気持ちは一般に知られるものとなった。のみならず、彼はエリザベスが崩御したときにその支持をとりつけるために、ヨーロッパのカトリック諸国との陰謀に身を染めたのである。それはのちに大スキャンダルを巻き起こした。最高判事長（President of Session）のシートンと、最近リンジー・オブ・バルカーズに代わって国務長官になったばかりのエルフィンストーン98)は、ともにカトリックであることが知られていた。また、長い間北の伯たちと親しくしていたモントローズ99)は大法官に任命された。ハントリー自身の姿も常に宮廷で見受けられるようになり、彼は侯爵に昇進させられた。牧師たちからすると、同じく侯爵に昇進させられたプロテスタントのハミルトンとまったく釣り合いがとれていないよう見えた。

（ホリルードにおける会議）

97）原注：この本についてもっとも早く言及されているのは、おそらく、（ソープ［Thorpe］氏によって 1598 年 10 月とされている）ニコルソンからの日付なしのアドバイスの中においてであろう。*S. P. Scotl.* lxiii. 50.（vol. i. 75）

98）ジェームス・エルフィンストーン（1557－1612）（ref: R. R. Zulager, *Elphinstone, James, first Lord Balmerino*, DNB）

99) 3 代目モントローズ伯ジョン・グラハム（1548-1608） スコットランドの貴族。ピューリタン革命で王党派の一員として活躍するモントローズ侯の祖父。（ref: Rob Macpherson, Graham, John, third earl of Montrose, DNB）

1599 年末、ジェームスは牧師たちの意志を変える最終的な試みを行うことを決意した。教会総会が 3 月にモントローズで開かれることになっていた。しかし、彼はそれに臨む前に、主要な牧師を集めて会議を開くのがよいだろうと考えた。そこで、先立つ 11 月にホリルードで自分の前で会議を開いた。彼は牧師たちに、終身代表を指名することに同意し、かつ、その者たちが主教の称号をもつべきだという彼の提案に賛成するように全力を尽くして説いた。しかし、それはうまくいかなかった100)。

（1600 年、モントローズにおける教会総会）

モントローズで教会総会が開かれたときも、やはり彼の努力は報われなかった。そこで決定されたことは、「議会で投票する教会総会の代表者は、任期は 1 年とする」、「代表者は、教会総会の従順な奉仕者以外の何ものにもなれないくらいの一連の制約によってしっかりと拘束されること」であった。

（主教の任命）

こうしてジェームスは自らを、体面を保ちながら抜け出すには難しい状況に陥らせてしまった。彼は、議会で決して投票することが許されない代表の指名に同意するのか、あるいは、もしも彼がいやがる教会に無理やり押しつけることができなければ、いかなる管轄権をも行使できない主教を任命しなければならなかった。このような状況下において、すべての要素が合わさって、彼を議会によって提示された選択肢101)を選ぶようにさせた。しかし、彼が最終的ステップを踏み切ることを決意したのは、ガウリー事件102)という奇妙な事件が起きて、その不可解な出来事に対する彼の説明を信用しない牧

---

100)原注：*Calderwood*, v. 746. （vol. i. 76）

101)議会によって提示された選択肢：すなわち、主教を任命すること。ただし、王が教会に認めさせることができなければ、いかなる管轄権をももたない主教となる。（本章 30 頁も参照）

102)ガウリー事件（Gowrie Plot）：1600 年 8 月 5 日、ジェームスがパースの近郊で狩りをしていると、3 代目ガウリー伯ジョン・ルスヴェンの弟アレグザンダーが兄の使者として来て、ガウリー伯が外国人カトリック教徒による陰謀のことについて話したいのでパースの町の屋敷まで来てくれといっていると伝えてきた。そこで行ってみると、ジェームスの話では、2 人は自分の暗殺を企てたという。ジェームスが急いで窓から助けを呼ぶと、助けがやって来てすぐに 2 人を殺害したという。ジェームスはまさに神のおかげで助かったといい、神に感謝を捧げることを牧師たちに依頼する。牧師たちの大半は王の話を信用したが、一部の牧師たちは、ガウリーの屋敷の中で何が起こったかは裁判を開いてみない

師たちと再び衝突状態に陥ったときであった。1600 年 10 月 14 日、彼は各シノッドの代表からなる集会を召集し、3 人の主教の任命に対する同意を得た。以前、主教に任命されて生き残っているごく少数の者に加えて新たに 3 人の任命となる。これらの主教103)は議会に議席をもち、11 月に召集された議会において投票を行った104)。しかし、彼らは教会の組織の中ではまったく場所を割り当てられていなかった。この主教の指名において当該集会の担った正確な役割はよくわからない。しかし、明かなことは、それは教会総会ではないので、教会の名においてふるまう権利はなかったということである。よって、これら新主教の地位は、国王によって世俗の官吏が指名されることによって得られるもの以上の何ものでもなかった。その事実は、この問題を扱う権限をもっていないごく少数の牧師たちの参加によって覆い隠された。こうして、過去 3 年に及ぶ労苦と陰謀のすべては無に帰した。そして、ジェームスは 1597 年の議会法通過のときにすぐやれたこと以上のことは何もできなかった105)。

とわからないといってジェームスの話を信用しなかったという。そこでその牧師たちは処分された。実際、ガウリーの屋敷で何が起きたかは今日でも謎とされている。国王が命の危険にさらされたということはないのではないかともいわれている。なぜならば、2 人がかりで暗殺されそうになれば、助けが来る前に少なくとも大きな傷害を負っていて不思議はないからである。(ref: MacDonald, 93-94)

103)これらの主教：つまり、新たに任命された 3 人の主教という意味であろう。

104)原注：コルダーウッドはその新主教たちを、「国王がその特命委員たちとそこに召集された牧師たちとともに選んだ者」と説明している。ニコルソンは手紙に次のように書いている。「私の最新の情報によりますと、国王は主教の任命のためにきわめて真剣に尽力なさいました。そして、それが教会の寛容な許容によって行われるようにするために、最高判事長、国務長官その他に命じて、教会の代表たちと会議を行わせました。教会の代表たちは、モントローズで開かれた前回の総会で決まったこと（国王はそれに満足しておられませんでした。また、その点における議会の冷たさにも）に基づいて、次のことが同意されるようにしました。すなわち、3 人の新しい主教が（中略）高位聖職者とともに投票権をもつことです。そして、彼らは本日それをもちました。そして、そのさらなる権限を次の教会総会に託しました」ニコルソンよりセシル宛 1600 年 11 月 15 日付書簡、*S. P. Scotl.* lxvi. 96. (vol. i. 77)

105)原注：多くの書き手が国王の主教のことを、まるでモントローズ総会によって同意された代表の任命と何らかの関連があるかのように頻繁に語っている。しかし、それは明らかに事実でない。主教たちはその称号を、単純に議会法と国王大権から引き出しているのである。1601 年のバーンティスランド（Burntisland）総会で、どちらの側からも主教についての言及はなかったようである。(vol. i. 77)

⑻イングランドの王位継承をめぐって

（イングランドの王位継承）

ジェームスがスコットランドの長老派にとってきたこのような態度は、彼がイングランドのピューリタンを扱うことになった際に彼の行動に影響を与えそうであった。しかし、今のところ彼の関心は、イングランドの王位継承で自分の権利を正当化することへと移っていった。ここ数年、イングランド人はエリザベスの崩御が近いのではないかと懸念してきた。そして、彼女が崩御すれば、外国の侵入を招かないまでも内部で動乱が起きるのではないかと見ていた。興味深い者は、14 人もの王位継承候補者リストをつくっていた。その中の 1 人として、異議を受けることなく完璧に権利資格を示せる者はいなかった106)。しかし、これらの者の大半は、自分たちは言い分を聞いてもらえるチャンスさえもないということがわかっていたにちがいない。彼らはヘンリー7 世よりも前の王から自分の主張を引き出しており、テューダー王家の権利を無視していた。

（スペイン王女の継承権）

彼らのうち、唯一その継承権が際立って持ち出されていたのは、スペインのフェリペ 2 世の長女イザベラ107)であった。スペインの王女がエリザベスの跡を継ぐことを求める者は、彼女はウィリアム征服王の娘の子孫であり、ヘンリー2 世の娘の子孫であり、ヘンリー3 世の娘の子孫であると力説していた。また彼らは、イザベラの先祖フランス王ルイ 8 世はイングランド王位に選ばれたことがあるという事実を持ち出し、その子孫はジョン王の子孫に優先してイングランド王位につく権利があると主張していた108)。しかし、そのような理由付けは決して決定的なものではなかった。それに、より過激なカトリック教徒が彼女の継承権を支持しているということは、国民を彼女のほうへなびかせそうにもなかった。

実は、唯一よくわからない点があるとしたら、それは、王位はサフォーク家が継ぐか、スチュアート家が継ぐかであった。

---

106)原注：Introduction to the *Correspondence of James VI. with Sir R. Cecil.* （vol. i. 78）

107)イザベラ・クララ・ユージェニア（1566－1633）のこと。父はスペイン王フェリペ 2 世、母は、フランス王アンリ 2 世と王妃カトリーヌ・ドゥ・メディシスの娘エリザベス・オブ・ヴァロワ（ref: Wiki, Eng, ‘Isabella Clara Eugenia’）

108)原注：Doleman (Persons). *Conference on the Succession*, 15. （vol. i. 78）

（1601 年、サフォーク家の血筋109）について）

議会法に基づく王位継承権（parliamentary title）は間違いなくサフォーク家の血筋に与えられていた。ヘンリー8 世は議会法によって、遺言によって王位継承を決める権限を与えられていた110)。そして、彼の行った指示は、彼自身の子どもやその子孫が絶えたあとは、彼の妹メアリー（サフォーク公爵夫人）の長女レディー・フランセスが継ぐべしというものだった。そして、フランセスやその子孫が絶えた場合は、フランセスの妹エレノアによって継がれるべしというものだった。フランセスの長女レディ・ジェイン・グレイが亡くなったあとは、サフォークの姉のラインはレディ・ジェイン・グレイの最初の妹キャサリンによって継がれていた。もしもエリザベスが 1587 年よりも前に崩御していれば、キャサリンかその家族の者111)が王位を継承していたとみてほぼ間違いないであろう。メアリー・スチュアート112)が生きている限り、ヘンリー8 世がスチュアート家をイングランドの王位継承から排除したことを国民が支持したもろもろの理由は重大であった113)。

ところが、メアリーの処刑によって、こうした理由はすべて無効となった114)。そして、今や世襲相続という通常のルールを変更するのに十分な理由はなくなった。もしも

---

109)ヘンリー 8 世の妹メアリー（サフォーク公爵夫人）の血筋。

110)ヘンリー8 世は議会法によって 1534 年、1536 年、1543 年に王位継承について定めていた。その中の後二者において、さらに遺言において自分の王位継承について定められるようになっていた。(ref: Mortimer Levine, “A Parliamentary Title to the Crown in Tudor England” in *Huntingdon Library Quarterly* Vol. 25, No. 2 (Feb., 1962), pp. 121-127. (published by University of Pennsylvania Press))

111)原注：キャサリン自身は 1567 年に亡くなっていた。
訳注：だから、それ以降は彼女の子孫が継ぐ。(ロード・ボーシャン)

112)メアリー・スチュアート（1542 年生，1587 年没，スコットランド女王 1542－1567)：彼女は生まれてすぐにスコットランド女王になり、しかし、1567 年に廃位された。跡は息子のジェームス 6 世が継いだ。廃位されたあと、彼女はイングランドに亡命し、そこで自らのイングランド王位継承権を唱え（ヘンリー7 世の娘マーガレットがスコットランド王ジェームス 4 世のもとに嫁いで、その孫)、エリザベス女王の廃位の陰謀に加わり、ついに 1587 年、女王の命令によって処刑された。彼女は廃位されたあとも含めて一般に “Mary, Queen of Scots” と称されている。

113)ヘンリー8 世がスチュアート家をイングランド王位の継承から排除した最大の理由は、メアリーがカトリックだったからであろう。これをイングランド国民の大部分も支持したものと思われる。ほかにも支持した理由はいろいろとあったと思われる。

114)メアリーが処刑されたあとは、息子のジェームス 6 世はプロテスタントだったので、イングランド王位の継承権者としては問題なくなった。むしろ、長子相続制の原則からい

議会が自分の思う通りにやることを許されていれば、ジェームスに継承権を確保するための法が間違いなく通過していたであろう。ジェームスはヘンリー7世の長女マーガレットの曾孫に当たるのだ115)。しかし、ここにエリザベスの偏見が邪魔をした。彼女は自分の目の黒いうちは、いかなる者にも自分の跡継ぎを称させないことに決めていたのだ。しかし、自然の成り行きで彼女が王座から離れたとき116)、ジェームスがほとんど例外なく全イングランド国民から受け入れられることは否定しがたいことであった。また、通常のやり方に戻したいという願望は、サフォーク家がエリザベス女王治世の最後のほうで置かれた状況によって間違いなく強められていた。なぜならば、キャサリン・グレイとハートフォード伯の結婚の有効性について疑義が持ち上がっていたからである。したがって、その長男ロード・ボーシャン（Lord Beauchamp）の嫡出性にも。もしも今後2人の婚姻が無効と判断されれば、ロード・ボーシャンの王位継承権もなくなるだろう。逆にもしも有効と判断されれば、サフォークの妹のラインの継承権はすべて無効となるであろう。

（アラベラ・スチュアートを支持する主張）

もしも議会法に基づく王位継承権という考え方が放棄されれば、その時はジェームスの継承権が必ず勝るであろう。ところが実際には、彼と同じヘンリー8世の姉マーガレットの子孫であるアラベラ・スチュアート117)のほうが強い権利資格をもっているということを見出した法律家たちがいた。というのは、ジェームスがスコットランド生まれだったのに対して、アラベラはイングランド生まれだったからである。彼らは、イングランドには「いかなる外国人もイングランドにおいて土地を相続できない」という大原則があると主張した。ゆえに、ジェームスがツィード川より南では1エーカーも相続できないのならば、王国全体はもっと相続できないはずだと彼らはいう。より穏健なカトリックのうちのごく少数は、アラベラの即位を歓迎したであろう。なぜならば、スコットランドの長老派教会の中で育てられた国王よりもアラベラからのほうが寛容政策を期待しやすいからである。しかし、こうした一部の例外を除けば、法律家のこのような風変わりな考え方は、国民にはまったく受けなかった。

えば、ヘンリー8世の妹筋のサフォーク家よりも、姉の筋のスチュアート家のほうが優先度が高かったといえよう。そこでジェームス6世に一気にお鉢が回ってきたように見えたが・・・

115)ヘンリー7世→マーガレット→ジェームス5世→メアリー→ジェームス6世となる。

116)つまり、自然と崩御したとき

117)マーガレット・テューダーの1度目の結婚の子孫がジェームス6世、2度目の結婚の子孫がアラベラ。ともに曾孫。

（ジェームス、あまりにも強くイングランドに自分の支持グループを作りたいと思いすぎる）

人民の願望の実現に立ちはだかるかも知れない唯一の障害は、ジェームスの性格から来た。何年かの間、彼は自分のほうから超人的な努力をしない限りは望むものは得られないと考えるようになっていた。彼は試練の日が来たときに自分の主張をサポートしてくれるような党派をつくりたいと強く願った。彼はエセックス118)と謀議を行った。マウントジョイとも行った。反徒のタイロン119)とまで行った120)。もしもイングランドに侵入するための軍隊の長になることに同意しなかったとしても、彼はとにかくそのような提案が来たときにきっぱりとは断らなかった。

（カトリックの陰謀）

スコットランドにはジェームスにいっそう危ない橋を渡らせたいと願うアドバイザーや仲間たちがたくさんいた。彼の周辺のカトリックは、ジェームスにローマ教皇の助けを借りてイングランド国王にならせ、イングランド・スコットランド両王国のカトリックに対して良心の自由を認めさせ、長老派やピューリタンを袖にさせたいと願っていた121)。彼らはジェームスにローマ教皇と直接手紙のやり取りをさせたいと考えていた。1599 年、エドワード・ドラモンドという者がちょうどローマに行こうとしていた。ジェームスはフィレンツェ公、サヴォイ公、その他幾人かの枢機卿に宛てた手紙をドラモ

---

118) 2 代目エセックス伯ロバート・デヴルー（1565－1601）（ref: Paul E. J. Hammer, *Devereux, Robert, second earl of Essex*, DNB）

119)2 代目タイロン伯ヒュー・オニール（c.1550-1616）アルスター地方のタイロンの領主。（ref: Nicholas Canny, O'Neill, Hugh [Aodh Ó Néill], second earl of Tyrone, DNB）

120)原注：このタイロン宛書簡は、*Lansd. MSS.*, lxxxiv. fol. 79 a. の中に収められている。それに対するタイロンの返事は、*S. P. Scotl.* lxvi. 28. に収められている。ジェームスとイングランドにおける党派との関係そのものに関しては、ブルース氏によって、*Correspondence of James VI. with Sir R. Cecil* の彼の序文の中である程度の長さで扱われている。これらの手紙には 1 つか 2 つの新しい事実が載っているが、その主要な価値は、それらの手紙がセシルの性格に光を当てているということである。これらの手紙とロード・ヘンリー・ハワードの手紙のトーンの違いほど参考になるものはない。後者の手紙は非常にしばしば、抗議が繰り返されてきたにもかかわらず、セシルの政策だけではなくその感情をも表しているととらえられてきた。（vol. i. 80）

121)原注：Gray to Salisbury, Oct. 3, 1608.　*Hatfield MSS.*　cxxvi. fol. 59.　（vol. i. 80）

ンドに託すことに同意した。その手紙で彼は、ヴェゾン司教（チズムという名のスコットランド人）が枢機卿に任命されることを支持してくれるように頼んでいた。ヴェゾンは、ローマにおけるジェームスの権益を見守ることを期待されていた。しかしジェームスは、ローマ教皇に直接手紙を書くことは断固として断った。その理由は、教皇と交渉することに良心の呵責を感じていたからではなかった。教皇を「教皇聖下（Holy Father）」と呼ぶことに異を唱えたからである。

（教皇に秘密の手紙）

国務長官のエルフィンストーンは自分よりも立場が上の者たちに促されて、教皇宛ての手紙を起草するようにドラモンドを説得した。その手紙は、司教の任命のことについて頼み、「この手紙の運び手は、ジェームスはカトリック教徒を迫害する意図はまったくもっていないということを伝えるように指示されている」ということを説明するものであった。エルフィンストーンはジェームスの署名を待っているたくさんの手紙の中にその手紙を紛れ込ませた。ジェームスはちょうど狩りに出かけようとしているときだった。そして、あとでドラモンドに教皇の称号122)を追加させた。少し経ってから、この手紙がローマに届けられたという知らせがエリザベス女王のもとに届けられた。そして、彼女は駐スコットランド大使に命じてジェームスを責め立てさせた。ジェームスはエルフィンストーンを呼びつけ、そのような手紙は送っていないと証言させようとした。後者はそのような手紙は知らないといっただけではなく、ローマから帰国したドラモンドを説いて彼のうそを支持させた123)。

---

122)称号：原文は“titles”と複数形になっている。ローマ教皇の公式の称号は、“Bishop of Rome, Vicar of Jesus Christ, Successor of the Prince of the Apostles, Supreme Pontiff of the Universal Church, Primate of Italy, Archbishop and Metropolitan of the Roman Province, Sovereign of the Vatican City State, Servant of the servants of God”と 8 つある。これを全部書いたという意味だろう。

123)原注：エルフィンストーンはこのあとロード・バルメリーノに叙爵された。1608 年にすべてのことが明るみに出た。本文に書かれた話は、彼の 1608 年 10 月 21 日付け国王宛ての手紙、および、彼の *Calderwood*, v. 740 における彼の語りからとられたものである。（*Hatfield MSS.*, cxxvi. fol. 67）私がそれを信じる理由は、私がバルメリーノの裁判を扱う段になったときに明らかにされるであろう。一方、次に続くイエズス会士クライヒトンの手紙からの抜き出しは、ジェームスの行動を明るみに出すことに役立つであろう。「最高判事長（すなわち、バルメリーノのこと）が陛下の同意も命もなく急送公文書をローマ教皇や枢機卿に送ったと告白したことに関しては、私はそれに全然関わっておりません。また、関わっているに値するようなことも全然行っておりません。しかし、私はエド

（ジェームスの寛容に対する考え方）

当時ジェームスが、カトリック教徒に対する寛容についてどう考えていたかを知ることは難しいことではない。イングランド王位に就く前に書いた手紙の中で、彼は、イングランド王位についてからの最初の議会で述べたこととそっくり同じことを述べている。すなわち、「自分は、宗教的意見の多様性のために血が流れることを欲しない。しかしまた、カトリックがプロテスタントを圧倒するほど増えることも欲しない」と。彼

ワード・ドラモンド氏が交渉を行い（私はそれが国王のためになる交渉だと思いましたので)、もって来た手紙のすべてを伝えるのを手伝ったので、すべてに関する真実をあなたにお伝えするのが便宜と心得ます。実はその交渉の中で、国王陛下のためにならないと思われることは一つもございませんでした。すなわち、それはヴェゾン司教を枢機卿に昇進させることでして、その目的は、陛下が枢機卿の集団の中に陛下に忠実な臣下の一人を置くことでした。これによって陛下の権益を促進し、陛下にとって害のあることをストップさせるためでした。とくに枢機卿たちに陛下を破門させないために、あるいは、陛下の臣下を、陛下との君臣関係から解かないように。(当時、それを得ようとしていた者がいくらかおりましたので。)（中略）陛下がカトリックを優遇する気がまったくないことは、当時、教皇には知らされていませんでした。というのは、反対の趣旨のことが手紙には書かれていたので。(中略）すなわち、陛下は生まれたときからその影響下で育まれてきた宗派を常に信じているにもかかわらず、カトリック教徒が陛下の忠実な臣民である限り、カトリックの敵ではなく、彼らの迫害もしないと。あの忌まわしいガンパウダー事件が起こるまでは、陛下は実際にそうされてきました。と申しますのも、スコットランドでもっとも忌まわしいものと見なされ、長老派の牧師たちによって死ぬまで迫害され続けてきた我々の修道会の者に対して、陛下は決してより厳しくはなさらなかったし、国外へ追放するということもありませんでした。また、会士の親に対して、罰則付きで子どもを国から出て行かせるということもありませんでした」。W. クライヒトンよりサー・A．マリー宛て 1609 年 1 月 27 日付け；*Botfield's Original Letters relating to Ecclesiastical Affairs*, i. 180. （vol. i. 82）

訳注：クライヒトンはウィリアム・クライヒトンのこと。イエズス会士。(ref: Mark Dilworth, *Crichton, William*, DNB）

また、「陛下の臣下を、陛下との君臣関係から解かないように」とは、当時のローマ教皇には、悪い君主からその臣下を、その君主に対する服従の誓いから解く力があると信じられていたようである。よって、君主がプロテスタントであるときは、教皇はその臣下をその君主との君臣関係から解くことがあったということか。カトリック教徒からしてみれば、以後、その君主に服従しなくてもよくなる。そのような申し出を行っていたカトリック教徒が当時いくらかいたということか。それをジェームスは阻止したかったか。(ref: Wiki, Eng, ‘Papal deposing power’）

は、カトリックの神父とイエズス会士が追放されて、カトリックがこれ以上広まることを、迫害することなしで手っ取り早く止められることを喜ぶだろう124)。

（1602 年、ジェームス、セシルたちと文通）

より良い社会秩序を実現しようと努力する中で、ジェームスはエリザベスの大臣からは助けを受けるつもりはなかった。後者の意見では、カトリックに対処する唯一の合理的方法は、彼らを押さえつけることであり、平信徒に対しては罰金と禁固刑で臨み、聖職者に対しては絞首刑で臨むことであった。ところが大臣たちの中で、ジェームスにイングランドの王座につく方法は、カトリックと秘密の合意に至ることではないということを教えることができる人物が 1 人いた。それはサー・ロバート・セシル125)であった。セシルはその父親バーリーの死後、エリザベスの政府の指導的政治家であった。彼はエリザベスから全幅の信頼を得ており、国務長官という要職を与えられていた。彼は、イングランドにとってはジェームスこそが王位に就くことが必要だということをはっきりと見ていた。また、ジェームスはイングランド王になるチャンスを逸(いっ)したくなければ、大人しくしていなければならないということもよくわかっていた。ゆえに、自分がジェームスのために働きたいということを知らせるために、ロンドンにあるスコットランド大使館126)の存在を利用した。これによって文通が突如として始まった。それは女王に秘密で行われた。文通の中でセシルは、ジェームスに性急になることはどんなことでも損だということを印象づけた。そして、最終的な成功に対して責任を負うことを保証した。ジェームスは、エセックスによってセシルに対してはよい印象をもっておらず127)、後者はインファンタ128)の王位継承権のほうを支持していると思っていたので129)、これには狂喜し、とんでもない支持者を得たと悟り、エリザベスの残りの治世を

---

124) *Correspondence of James VI. with Sir R. Cecil*, p. 36.　(vol. 1,82)

125)サー・ロバート・セシル（1563－1612）(ref: Pauline Croft, *Cecil, Robert, first earl of Salisbury*, DNB)

126)16 世紀、スコットランドからの代表がロンドンを訪れたときに宿泊した建物があった通りが「グレート・スコットランドヤード」と呼ばれるようになったらしい。ロンドン警視庁の初代本部庁舎の裏口はグレート・スコットランドヤード街に面していた。その裏口が一般によく使われたことから、本部庁舎のことを「スコットランドヤード」と呼ぶようになった。そして、ロンドン警視庁そのものを指すようになった。(ref: Wiki, Eng, 'Great Scotland Yard' ; 'Scotland Yard')

127)エセックスとセシルは政敵同士。

128)インファンタ（infanta)：スペイン王女のこと。(本章 45 頁参照)

129)ジェームスは、エセックスからセシルは親スペイン派だと聞かされていたので、当

セシルのアドバイスに従って生きることに決めた。この慎重で分別のある行動が最終的に報酬をもたらした。はたしてその時が来たとき、ジェームスはベリック130)からランズエンド131)に至るまでイングランド人民から歓迎された。異を唱える声はほとんどなかった。

然、スペイン王女のイングランド王位継承を支持していると思っていたのだろう。セシルは、ジェームスをイングランドの王位につけてスペインとの講和を図ることを考えていたようである。

130)ベリック（Berwick-upon-Tweed）：ツイード川河口に発達した北海に面したイングランド北部の町。スコットランドとの境界のすぐ近くにある。（Wiki, Eng, 'Berwick-upon-Tweed'）

131)ランズエンド（Land's End）：イングランド南西部、コーンウォール州の最西端にある岬。（ref: Wiki, Eng, 'Land's End'）つまり、「ベリックからランズエンドに至るまで」とは、「イングランドの隅から隅まで」という意味である。